

新潟県中学校教育研究会

令和6年度 指定研究（1年次）

経過の概要報告書・資料

社会・理科・英語・音楽・保健体育・学校保健

（各教科・領域ごとに上越・中越・新潟・下越の順に掲載）

（音楽・保健体育・学校保健は指定の2地区のみ）

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 新保 隆之
(学校名: 柏崎市立東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 社会科
- 2 郡市名 柏崎市刈羽郡 3 会場校 柏崎市立松浜中学校
- 4 研究主題

「当事者意識のある深い学びを実現させる授業の工夫」
～他者と協働し、粘り強く最適解を探究する課題解決を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

①主題設定の理由

本研究では、学習指導要領改訂の経緯や趣旨を踏まえ、研究主題及び研究内容の検討を新潟県中学校教育研究会社会科部上越地区研究推進委員会（以下、上越地区研究推進委員会）において積み重ねた。研究推進委員から様々な提言や意見が出され、特に「主体的・対話的で深い学び」に関わる日々の授業実践や生徒の姿等から次に示す課題が共有された。

- ・生徒の問題意識や追究意欲が高められないまま、課題解決に向けた学習が展開される。
- ・協働的な学びが、「対話の深まり」に発展しない。
- ・振り返りやまとめの段階で、生徒の個々の「思いや考え」が表出されていない。

上越地区研究推進委員会では、これらの課題の背景に、生徒の学習意欲を喚起する課題が授業で提示できていないことや深い学びにつなげる有効な手立てや働きかけが不十分であることが影響していると分析した。特に、協働的な学びにおける解決や探究の対象となる課題を、生徒が自分の問題として十分に認識していない点について、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりの改善点であると捉えた。同時に、他者と協働し対話を積み重ね、自分たちの現実に応じた最適解を粘り強く探究すること、すなわち「当事者意識をもつ」ことは、「主体的・対話的で深い学び」を促進させるとともに、新学習指導要領が示す「主体的に社会の形成に参画する力」の育成へと結び付けていくと考える。

以上の理由から、本研究では、主体的に社会の形成に参画する力を育成するために必要な「主体的・対話的で深い学び」を実現させる授業づくりとして、社会的事象を自分事として捉える「当事者意識」をキーワードに、他者と協働して粘り強く最適解を探究する課題解決型の単元を開発し、手立ての有効性を分析・検証することとした。

②目指す生徒の姿

本研究における目指す生徒の姿を、上越地区研究推進委員会が目指す研究の方向性と会場校の生徒の様子や協働的な学びの実態を踏まえ、次のように設定した。

- 他者と協働し対話を積み重ね、最適解を粘り強く探究する生徒
- 社会的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察する生徒
- 自身の現実生活に即した（当事者意識を持つ）社会参画の具体を模索する生徒

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

今年度は下記の点を中心に研究を進めてきた。

（１）本研究で開発する単元について

①「貫く学習課題」を軸とした単元構成

課題解決型の学習過程を中核とし、生徒が追究・解決したくなるような課題を、単元全体の学習課題として設定する。

②課題設定について

今起きている身近な社会的事象や地域社会に内在する解決困難な課題と現実の生活をつなぎ、生徒が考えたい、解決したいと思える課題の内容とする。

（２）「主体的・対話的で深い学び」を実現させる具体的な手立て

①収束場面における学びを深める手立て

協働的な学びを深い学びにつなげるためには、意見交流や議論により広がった思考を再構成させ、新たな気付きや発見及び疑問を喚起させる授業者のさらなる「ひと工夫」が必要になる。本研究における具体的な「ひと工夫」の視点は以下のとおりである。

- ・「本当にそうだろうか」「本当に良いのか」等の問いかけや揺さぶり
- ・考える視点や社会的な見方・考え方を示し、それらを基に吟味・検討の場面の設定

②「深い学びの技法」の効果的な活用

本研究では、「比較・検討」「多面的・多角的に考察」「練り上げ」の３点を重点技法に位置付け、複数の資料（複数の立場）の比較、自分の考えと仲間の考えとの違いの吟味、他者との協働で生み出す最適解の探究に取り組む。

7 １年次の成果と課題

（１）成果

- ①修学旅行訪問予定地で生じている社会問題を、単元を貫く学習課題として設定し、毎授業ごとに学習課題と関連付けて指導することで、生徒の自分ごととしての問題意識が醸成された。
- ②多面的・多角的な思考を生み出す資料と社会的な見方・考え方を働かせる視点を適切に示すことで、複数の立場からの比較・検討や多様な意見や考え方に対する吟味が促された。
- ③新たな気付きや発見及び疑問を喚起させる授業者の机間指導（補助発問）により、議論の活性化が促され、現実在即した最適解を生み出そうとする粘り強い学習活動に結び付いた。

（２）課題

- ①全体共有（グループ発表）後に、グループ内で再検討し、提案の再構成を図るべきであった。
- ②画像・グラフ・メリット・デメリット等の視点を提示することで、より深い学びを実現させる働きかけをすべきであった。

8 運営の成果と課題

研究推進委員それぞれの意見や考えを基に研究主題及び研究内容が練り上げられた。指導者からも効果的な指導・助言がなされ、研究の質的向上が大きく図られた。研究推進委員によるプレ授業が積極的に行われ、生徒の学ぶ姿や授業のあり方等に関する情報交流が貴重な研修の場となった。

一方、研究推進委員が所属する学校や団体の実情により、十分な研修時間を確保することができなかった。プレ授業で生じた知見や工夫点等を十分に吟味し、検討し、充実した議論が展開される研究推進委員会の時間的確保が今後の課題となる。

1 部会名 社会科

2 郡市名 柏崎市刈羽郡 3 会場校 柏崎市立松浜中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	刈羽村立刈羽中学校・校長	後藤 純二
(2) 研究推進責任者	柏崎市立東中学校・教頭	新保 隆之
(3) 会場校責任者	柏崎市立松浜中学校・教頭	土田 貴宏
(4) 県・郡市指導主事	柏崎市教育委員会・指導主事	近藤 多計夫
(5) 研究推進委員(授業者) 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員 研究推進委員	柏崎市立松浜中学校・教諭	伊佐 勝
	柏崎市立第二中学校・教頭	吉原 裕介
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	佐々木 太耀
	柏崎市立東中学校・教諭	松田 涼
	刈羽村立刈羽中学校・教諭	後藤 弦

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/18(火)／柏崎市立東中学校	2	事前打ち合わせ：研究内容検討・日程確認
2	6/26(水)／柏崎市立松浜中学校	8	第1回運営推進委員会：研究主題検討
3	8/20(火)／柏崎市立東中学校	2	事前打ち合わせ：研究主題検討
4	8/21(水)／柏崎市立松浜中学校	7	第2回運営推進委員会：研究内容検討
5	9/20(金)／柏崎市立東中学校	2	事前打ち合わせ：プレ授業指導案検討
6	10/4(金)／柏崎市立東中学校	3	事前打ち合わせ：プレ授業指導案検討
7	10/18(金)／柏崎市立東中学校	7	第3回運営推進委員会：プレ授業指導案検討
8	11/8(金)／柏崎市立東中学校	3	事前打ち合わせ：プレ公開授業準備
9	11/19(火)／柏崎市立松浜中学校	7	第4回運営推進委員会：1年次プレ公開授業及び協議会
10	12/20(金)／柏崎市立松浜中学校	8	第5回運営推進委員会：1年次研究の総括

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 山田 圭祐
(学校名: 長岡市立東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 社会科

2 郡市名 長岡市・三島郡 3 会場校 長岡市立栖吉中学校

4 研究主題

公民としての資質・能力の基礎を育成する学習指導の工夫
～ 「構造化された問い」と自らの価値や行動を決定する活動を取り入れた授業実践 ～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生徒が深い学びへたどり着くための手立てとして、①教師が「構造化された問い」を設定することと、②生徒が「自ら価値や行動を決定する活動」を取り入れた授業を行うこと、の二つを設定する。

社会科において教師が「問い」を設定することは、生徒が探究的に学習を進める動機づけになる非常に重要な作業である。その「問い」を構造化することで、単元レベルでの問いの系列化をすることができ、一時間一時間の授業づくりが3年間の社会科の授業を通して達成すべき目標へとつながる。また、生徒が「自らの価値や行動を決定する活動」を授業に取り入れることは、教師の「問い」に対して生徒が社会的な見方・考え方を働かせて深く考える活動へとつながる。また、意思決定する場面では、他者と協働したり、意見交流をしたりするなど様々な活動が考えられる。

中越地区推進委員会では、「公民としての資質・能力の基礎」を「主体的によりよい社会を創ろうとする意欲や態度（主体的に社会に参画しようとする力）」（磯山(2017)・唐木(2017)）と捉えた。これを踏まえると、日本財団（2024）「自分の行動で、国や社会を変えられると思う（45.8%）」（アメリカ 65.6%、イギリス 56.1%、中国 83.7%、韓国 60.8%、インド 80.6%）、「自分は責任がある社会の一員だと思う（61.1%）」（アメリカ 79.4%、イギリス 80.7%、中国 92.1%、韓国 74.5%、インド 86.8%）と各国と比較して日本の数値が低いことは課題であると指摘できる。

「主体的に社会に参画しようとする力」については、様々な力が考えられるが、1年次の研究においては、特に「課題発見力」であると考え。1年次の公開授業における歴史的分野では、歴史を「大観」し、「多面的・多角的に考察する」ことで、その時代の「社会構造」を理解し、その上で課題を発見し、解決しようとする「課題発見力」につながると考える。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

- ① 深い学びに至るために、「本質的な問い(Essential Question)」を「単元を貫く問い」として設定し、各授業の「中心発問(Main Question)」でそれぞれの学習課題に迫り、授業中の「補助発問(Sub-Question)」で生徒の思考を促しながら授業を進める。これら、「構造化された問い」を設定することで、深い学びへとつなげ、さらに「探究したい」という主体的な学びへとつなげる。（下図「問いの構造化イメージ図」）

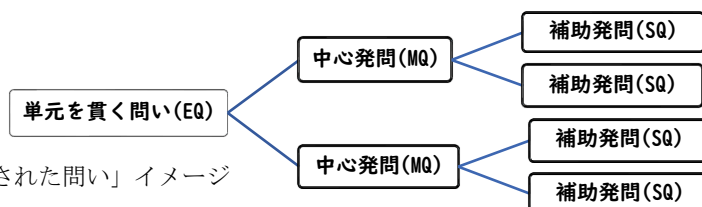


図1 「構造化された問い」イメージ

- ② 単元の中に自らの価値や行動を決定する「価値判断」や「意思決定」の場面を設定する。「価値判断」や「意思決定」は、事実に知識を活用して、獲得した概念をもとに、社会的な見方・考え方を働かせて判断を行うことになるため、深い学びへとつながると考える。
- ③ 単元の特性に応じて、「学びの技法」を取捨選択したり、活用したりしながら「価値判断」「意思決定」の活動を行う。
- ④ 「本質的な問い」を中心とした「構造化された問い」を設定すること、単元内に「価値判断」や「意思決定」の場面を設定することで、「公民的な資質・能力の基礎」の育成が果たされるかどうかを検証する。

7 1年次の成果と課題

- 3回の公開授業で、単元を通して「構造化された問い」の設定をすることができ、一定の成果を上げることができた。例えば、「単元を貫く問い」をもとに各授業での問いを考えることで、ブレずに授業を計画することができた。また、授業者にとって授業設計の時点で生徒の思考を促す「問い」を考えることで、生徒に提示する資料を整えやすく、授業デザインがしやすかったという振り返りがあった。
- プレ授業を行う前に推進委員どうして授業を見せ合い、指導案検討の材料とした。このことで、授業者がイメージをもってプレ授業に臨むことができた。また、推進委員にとっても実際に公開授業を行うことで、理論と実践をつなげることができた。
- 「単元を貫く問い」を他者と話し合いながら解決することで、コミュニケーションが上手くできるようになっていった。
- ▲「問い」が生徒にとってどうであったか、という視点がもっとあった方が良かった。生徒からの「問い」をもっと授業に取り入れられるような工夫が必要。
- ▲来年度への提言として、もっと生徒にゆだねたり、選択させたりする時間があった方が良いのではないかとの指摘があった。
- ▲プレ授業の分野の決定やそれに付随して、指導案の内容の検討が遅くなってしまった。来年度は、年度当初にあらかじめ、実践発表を行う分野を考慮して計画を立てることが必要。

8 運営の成果と課題

- 研究全体、公開授業では、中教研の推進委員の中で仕事を行い、適切に運営することができた。
- ▲市教研との連携を工夫し、よりスムーズな研究会の運営に努める。

※1 各地区中教研事務局と当該教科・領域の15部会全県部長へそれぞれ1部ずつ提出する。(べ切1/10)

※2 資料の4(4)県・郡市指導主事の行は、指導者が県・郡市指導主事の場合は、その行を詰める。また、前副部長はこの表には載せない。

※3 報告書(1~8)は2ページにする。資料(1~5)は1~2ページにする。報告書のみが研究活動の概要に掲載される。

※4 提出の際は、注意書きや※1~※4を削除して提出する。

1 部会名 _____ 社会科 _____

2 郡市名 _____ 長岡市・三島郡 _____ 3 会場校 _____ 長岡市立栖吉中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	長岡市教育センター・指導主事	植木 朋弘
(2) 研究推進責任者	長岡市立東中学校・教諭	山田 圭祐
(3) 会場校責任者	長岡市立栖吉中学校・教諭	宮田 雄介
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員(授業者)	長岡市立栖吉中学校・教諭	笠輪 敬
	長岡市立宮内中学校・主幹教諭	阿部 信也
	長岡市立堤岡中学校・教諭	古川 夏希

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月27日／栖吉中	4	○研究の方向性について ・ 前回研究の成果と課題（zoomで前責任者より説明） ・ 県中教研の方針の確認（資料を基に責任者が説明） ・ 社会科における「深い学びにいたる授業」に至るための方策検討
2	8月8日／栖吉中	4	○研修主題の決定 ・ 研究主題の決定 ・ 具体的な手立ての検討 ○公開授業に向けてのスケジュール確認 ・ 授業者（栖吉中 笠輪先生）の単元、授業構想の検討
3	8月22日／栖吉中	4	○ブレ授業指導案検討（栖吉中 笠輪先生） ・ 分野と単元の確認 ○公開授業指導案検討（宮内中 阿部先生） ・ 10月8日の公開授業の指導案検討
4	10月8日／宮内中	5	○委員公開授業①（宮内中 阿部先生） ・ 公開授業 ・ 振り返り ○委員公開授業②（堤岡中 古川先生） ・ 指導案検討 ○ブレ授業（笠輪先生）の指導案検討
5	10月18日／堤岡中	5	○委員公開授業②（堤岡中 古川先生） ・ 公開授業 ・ 振り返り ○委員公開授業③（宮内中 阿部先生） ・ 指導案検討 ○ブレ授業（栖吉中 笠輪先生）の指導案検討
6	11月12日／宮内中	4	○委員公開授業③（宮内中 阿部先生） ・ 公開授業 ・ 振り返り ○ブレ授業（栖吉中 笠輪先生）の指導案検討 ・ 使用ワークシートとスライドの検討 ・ 当日の要項の確認
7	11月20日／栖吉中	5	○1年次ブレ授業（栖吉中 笠輪先生）・協議会
8	12月20日／栖吉中	5	○1年間の振り返り、来年度の計画 ・ 今年度の成果と課題、来年度の展望

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する

令和 6 年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 木村 伸
(学校名: 新潟市立葛塚中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 社 会
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 1 年次 新潟市立藤見中学校
2 年次 新潟市立新津第五中学校

4 研究主題

社会認識を高め、これからを生き抜く力を獲得する生徒の育成
～学び合いを通して、子どもが自ら考え、判断し、表現できる授業の在り方～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

社会科の目標は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を育成することである。また、現代の急速に変化を続ける社会を生き抜くため、生徒一人一人にとって自己決定し、自ら行動する姿勢が大切である。そのため、社会に対する関心を高め、社会事象の基本的な知識を身に付け、事象相互のつながりや因果関係について理解し、自分の考えをもちながら主体的に行動する態度や資質を身につけさせたいと考え、上記の研究主題を設定した。

生徒一人一人が自己を客観的にとらえ（認知し）、他者とのかかわり合いながら考えを広げ深める協力的な学習活動や、思考を表現に置き換えたり、多様な手段で説明したりする生徒を目指していく。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

「単元を通したねらい」を達成するために、「深い学びの技法」を活用し、社会的見方・考え方を深めていく。 ※2 年次「地方自治単元」をもとに構想

（1）知識やデータに基づいて、単元を貫く課題を設定する。（技法②）

・新潟市の人口の推移と人口減少の資料や市民の意見の読み取りを通して新潟市の課題を明確にし、「新潟市が存続し続けるために必要なことは何か」という単元を貫く課題が自分事としてとらえられるようにする。

（2）話し合いや学び合いを通して異なる多様な意見を比較して考える。（技法⑥⑨⑩）

・新潟市の課題に対して何ができるかを具体例を通して学ぶことで地方自治の仕組みや直接請求権を理解する。

・新潟市や秋葉区の行政と地域住民に何ができるのかについて自分の意見を持ち、仲間と話し合うことを通して自分の意見をより深める。

（3）理由や根拠を示しながら自分の言葉で学んだことを整理してまとめ、自分の人生との関わりについて考える。（技法⑬⑮⑰）

・地方分権について効率と公正の視点から評価することを通して、「どうすれば新潟市は存続可能な街に近づくか」について根拠をもってまとめる。

・学んできたことをまとめる活動を通して、将来の自分の行動について具体的な考えを構築することができる。

7 1年次の成果と課題 歴史的分野「第二次世界大戦」

○「子どもが考え、学ぶ授業」をつくるために、第二次世界大戦の単元デザインを工夫し、単元を通して子どもの思考がどのように変化し、学びの深まっていく様子を発表した。

①単元を貫く目標設定(技法①)

第一次世界大戦の平和への動きがあったにもかかわらず原爆を落とされた場面から「なぜ第二次世界大戦は起きたのか、日本は戦争において被害者か加害者か」の単元を貫く課題に設定できた。授業ごとに指導ルーブリックを作成し、生徒にも公開することで学習の達成基準を明確にし、単元の課題解決につなげることができた。

・話し合い活動(技法③⑤⑨⑩⑬⑯)

戦争への課程について教科書を中心に調べ学習を行い、自らまとめたことを話し合いながら構造化を行い「なぜ第二次世界大戦が起きたのか」について既習事項の関連性考察することができた。

・単元のまとめ(技法⑥⑦⑧⑪⑬⑮⑱⑲)

「なぜ第二次世界大戦は起きたのか」「単元のはじめと終わりでどのように考えが変化したか」「単元を通して自分の学びが深めるのに有効だった学び方は何だったか」の3つの課題を自分の言葉でまとめた。

成果

- ・アンケートでは、90%以上の生徒が概ね達成と答えており、学習内容の理解ができていた。
- ・学習内容を自分で考えたり自分なりに解釈したりしながら学習に取り組む姿が見られた。
- ・学びを構造化したことが生徒に理解を深めさせることができていた。

課題

- ・パフォーマンス課題を、立場を明らか（例えば今回のような2択）にするのか、より多面的・多角的に考察するには自由度のある課題設定が良いのか、今回の実践発表後の協議会では意見が分かれていた。
- ・表面的な理解にとどまり、概念的な理解までにいたらない場面があった。
- ・他者の考えに対する質問がうまくできず、話し合いが深まらない場面があった。
- ・人物の学習が少なかったため、共感的理解が少なかった。

8 運営の成果と課題

成果

- ・毎年11月開催で同じ単元の授業公開が多かったが、単元による変容を発表したことで、違う時期にどのような授業を行っているのかを考えるきっかけになった。
- ・1時間の授業ではなく単元でどのように理解を深め、考えが変容していくのかを見ることができた。
- ・次年度に向けて単元を通してどのように生徒の理解を深め、生徒自ら学んでいくのかの方策を考えることができた。

課題

- ・授業の様子が動画で一部しか見られなかったため、授業での様子がもっと知りたいという意見があった。
- ・実践発表の時間が延び、協議会が短くなってしまった。

1 部会名 社会

2 郡市名 新潟市 3 会場校 1 年次 新潟市立藤見中学校
2 年次 新潟市立新津第五中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学付属新潟中学校・校長	山本 達也
	新潟市立横越中学校・校長	中川 秀太
(2) 研究推進責任者	新潟市立葛塚中学校・教諭	木村 伸
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第五中学校・教諭	岩見 泰
(5) 研究推進委員(授業者)	新潟市立新津第五中学校・教諭	渡辺 美羽
	新潟市立藤見中学校・教諭	佐藤 裕子
	新潟市立光晴中学校・教諭	小野 賢
	新潟市立早通中学校・教諭	渡邊 学
	新潟市立藤見中学校・教諭	揖斐 数記
	新潟市立藤見中学校・教諭	戸田 明

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人 数	主な内容
1	5 月 30 日／藤見中学校	6	研究主題の決定・単元の決定
2	8 月 2 日／藤見中学校	9	指導案検討・深い学びの技法の確認
3	10 月 17 日／藤見中学校	10	発表内容検討
4	11 月 28 日／藤見中学校	8	今年度の成果と課題
5			
6			
7			
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 高橋 保嗣
(学校名: 五泉市立五泉中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 下越地区・社会
- 2 郡市名 五泉市・東蒲原郡 3 会場校 阿賀町立三川中学校
- 4 研究主題

資質・能力を育む深い学びにいたる授業の創造
～社会的な見方・考え方を働かせる工夫を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 主題設定の理由

「社会的な見方・考え方を働かせる」ことは社会科の本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、資質・能力全体に関わるものであると考えられるため、学習指導要領の社会科の目標の柱書に位置付けられている。

そこで、社会科の見方・考え方を生徒が働かせて考えることで、社会科で育む「資質・能力」を身につけさせたい。そのためには、授業者が社会科の見方・考え方を生徒が働かせるような手立てや「深い学びの技法」を活用する必要があると考えて、本主題を設定した。

(2) 目指す深い学びの姿

授業（学び合い）を通して、社会の見方・考え方を働かせて、社会的事象に対する考えの変容や広がり、深まりを、学習内容と関連付けて表現できる姿。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

(1) 研究の方法

社会科で育む資質・能力を共有し、その資質・能力を社会的な見方・考え方を働かせて獲得する姿を深い学びとした。「深い学び」に至るための手立てを3本柱として、提案授業によってその手立ての妥当性を検証する。

(2) 研究の内容

研究主題や目指す深い学びの姿に迫るために、以下の3点を中心に研究を進めることとした。

①自分ごととして捉える工夫

学習指導要領の社会科の目標に「社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」の育成を目指す、とある。社会を作っていく、参画をしていく国民としての自覚や主体的な学びを促すために、生活と関連付けたり、身近なものに関連付けたり、生徒本人と社会的事象を結びつける工夫をする。

(関連：県中教研「深い学びの技法」①)

②言語活動の充実

学び方の工夫（学び合いの工夫）を通して、説明や議論する場面が組み込まれた課題解決学習を目指す。資料から根拠を見つけ出し、既習事項や自分の思いと結びつけて表現や比較・検討することができる「問い」を、論拠をもって最終的に選択・判断できる活動にしたい。

(関連：県中教研「深い学びの技法」⑬、⑮)

③深める問いの設定

授業の適切な場面に、社会科の見方・考え方が働く問いを創り出す（設定する）。見方・考え方を働かせた生徒の姿を意識した問いにより、多面的・多角的な考察、学んだことを生かした課題解決に向けた選択・判断ができる場面にしたい。（関連：県中教研「深い学びの技法」⑦、⑧）

7 1年次の成果と課題

プレ授業をするにあたって、指導案検討から授業実践までの成果と課題を、本研究推進委員（以下、推進委員）が研究の3本柱とする手立てから振り返ってみた。

（1）自分ごととして捉える工夫	
<成果> ・自分ごとに落とし込こんで考えさせることで、主体的な活動になった。 ・自分ごととして捉えさせるための方法を検討しにより、いくつか方法があることが確認できた。	<課題> ・単元全体を構想して、主体的な活動を意識して、生徒が自分と社会的事象をつなげていく手立てを検討する必要がある。
（2）言語活動の充実	
<成果> ・生徒が文章で自分の意見を表現させる活動ができた。 ・ロイロノートの活用で、生徒の毎時間の思考の変容がわかった。	<課題> ・話し合いの場面で考えの発表に終わってしまい、相手を納得できる議論まで深まらなかった。 ・言語活動を充実させるための学び合いを工夫する必要がある。 ・生徒が主体的に活動する場面と、教師が出る場面を精査していく。
（3）深める問いの設定	
<成果> ・様々な問いを模索しながら、深める問いに挑戦できた。 ・深める問いのあり方を考えることができた。	<課題> ・一つの授業の中に問いが2つあると、生徒は混乱する（似たような問いであればなおのこと）。単元を貫く問いと深める問いの関係を明確にしていく必要がある。 ・深める問いとは、どのように活用するのか。

8 運営の成果と課題

○推進委員会では研究の方向性、授業の構想、具体策と順序だてて議論ができた。

○授業を構成する場面では、授業者の原案をもとに推進委員が自分だったらこうするという「問い」を上げながら、指導案を練り上げることができた。特に、「単元を貫く問い」を推進委員で検討することができたのは、有意義な時間となった。

○研究の3本柱を軸にした授業が構成できたことで、成果と課題がはっきりとしたことも成果であり、来年度につながる1年次になった。

○指導案を検討する際にあたり、推進委員会だけでなく、郡市の社会科部のメンバーが集まって指導案を検討する機会を設定した際、今までにない視点や意見が多く出て大変参考になった。来年度も郡市社会科部全体での検討会を計画的に組んでいきたい。

▲仮説の検証が曖昧であったこともあり、推進委員で「深い学び」とは何か、「社会的な見方・考え方」とは何か、というイメージの共有がはっきりとできていなかった。

1 部会名 下越地区・社会

2 郡市名 五泉市・東蒲原郡

3 会場校 阿賀町立三川中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	阿賀町立三川中学校・校長	佐藤雅秀
(2) 研究推進責任者	五泉市立五泉中学校・教諭	高橋保嗣
(3) 会場校責任者	阿賀町立三川中学校・教諭	長谷川一憲
(4) 県・郡市指導主事	下越教育事務所・学校支援第2課長	白澤道夫
(5) 研究推進委員	阿賀町立三川中学校・教諭	頭川 玄（授業者）
	阿賀町立阿賀津川中学校・教諭	鈴木 碧
	阿賀町立阿賀津川中学校・教諭	香坂しおり
	五泉市立村松桜中学校・教諭	片桐大地

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月24日／三川中学校	4	研究の方向性の検討
2	7月31日／五泉中学校	6	「深い学び」に迫るための研修、研究の方向性（研究主題）の決定
3	9月4日／五泉中学校	5	11月6日プレ授業指導案検討会①
4	9月25日／五泉中学校	6	11月6日プレ授業指導案検討会②
5	10月16日／阿賀津川中学校	6	11月6日プレ授業指導案検討会③
6	11月6日／阿賀津川中学校	7	プレ授業（公開授業・協議会）
7	12月2日／五泉中学校	6	今年度の成果と課題、来年度の方向性の確認
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 中野 祐輔
(学校名: 上越市立城西中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 理科
- 2 郡市名 上越市 3 会場校 上越市立城東中学校

4 研究主題

課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

現行の学習指導要領では、学習を通して「何を学ぶか」に加え、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を意識した指導が求められており、身に付けた資質・能力が様々な課題の対応に生かせることを実感できるような学びの深まりが欠かせない。

授業においては、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたりすることが求められる。生徒が既習事項を振り返りながら考えることができ、主体的に探究したくなるような課題の設定及び提示が生徒の学びの深まりにつながると考え、本研究では、深い学びについて「生徒が、自己の学びを振り返りながら学びをつなぎ、科学的に探究することができる授業」として捉え、研究主題を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

本研究では主題に迫るために以下の2つの「深い学びの技法」を基に研究の手立てを講じた。

（1）学んだ知識を活用して課題や目標を設定する（「深い学びの20の技法①」）

授業における課題を生徒が既習事項から考えうるものであると捉え、授業における課題設定及び提示方法を協議した。日常生活と結び付けたものや生徒の素朴概念やこれまでの学習内容から考えることができる課題となるよう工夫した。生徒が自然の事物・現象において疑問点を見だし、疑問に感じたことを話し合い、生徒が自ら学習課題を設定することで、自分事として課題を捉え、解決に向かうことが「主体的・対話的で深い学び」につながると考える。

（2）学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする（「深い学びの20の技法⑨」）

生徒自身が自らの学びを振り返り、メタ認知することで、学習内容や目の前の現象を既習内容とつなげながら、より深く理解することができると思う。生徒が実験結果を基に論理的に考えたり、他者との共有をしたりしながら、考察をより科学的なものにしていくことを目指したい。

また、日常生活で見かける現象について議論し、既習の知識や技能を活用する場を設定することで、考えを深め表現する力を身に付けさせたい。

7 1年次の成果と課題

(1) 成果

今年度は課題設定に重点を置いて、検討を重ねた。今年度の授業実践において、身近な事象を取り上げ、既習内容を活用しながら課題設定をしていく過程で生徒は課題を自分事として捉え、科学的な探究ができたと考える。

(2) 課題

今年度は一つの授業（光の性質）に重点を置いて研究を進めてきた。

手立ての有効性や汎用性についての検証は課題が残った。また、本單元における生徒の探究の過程において、より有効な手立てがあるかの検討も必要と考えている。

今後、研究推進委員が授業実践を重ね、手立ての有効性や汎用性を検証していく。さらに生徒が学びをつないでいくためのより有効な手立てについても検討を重ねたい。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

研究推進委員全員が集まり、指導案を十分に検討する時間が確保できたため、様々な視点から授業を練り上げることができた。また、プレ授業だけでなく各推進委員が勤務校において同一指導案で授業実践を行い、授業を見合う機会を設定することができた。

(2) 課題

今年度は、授業実践を行う単元の選定や単元構成の作成に時間を要してしまった。今年度中に単元や教材について決定し、来年度は年度初めから各推進委員の授業実践を計画していき、実践を重ねることで研究の深まりを目指していきたい。

1 部会名 _____ 理科 _____

2 郡市名 _____ 上越市 _____ 3 会場校 _____ 上越市立城東中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育事務所・指導主事	植木 厚夫
(2) 研究推進責任者	上越市立城西中学校・教諭	中野 祐輔
(3) 会場校責任者	上越市立城東中学校・教諭	堀越 諒太
(4) 研究推進委員	上越市立東頸中学校・校長	牧井 創
	上越市立東頸中学校・教諭	永井 哲
	上越市立牧中学校・教諭	山本 明子
	上越市立直江津中学校・教諭	和田 慧一
	上越市立名立中学校・教諭	岩田 啓佑
	上越市立城東中学校・教諭	平原 琢也

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人 数	主な内容
1	8月22日／東頸中学校	8	「深い学び」を実現するための手立て・研究主題・指導案検討
2	10月17日／城東中学校	7	プレ授業に向けた指導案検討
3	11月13日／東頸中学校	8	プレ授業（授業者：東頸中学校 永井哲），研究協議会
4	12月3日／城西中学校	2	プレ授業指導案での授業実践（授業者：城西中学校 中野祐輔）
5	12月6日／直江津中学校	2	プレ授業指導案での授業実践（授業者：直江津中学校 和田慧一）
6	12月17日／城東中学校	9	プレ授業（授業者：城東中学校 平原琢也） 今年度の成果と課題，来年度の予定確認等
7			
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和 6 年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 高橋 悠太
(学校名: 南魚沼市立塩沢中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 理科

2 郡市名 南魚沼・南魚

3 会場校 南魚沼市立六日町中学校

4 研究主題

「生きて働く知識」を形成する授業のあり方
～学習した知識や考え、表現を磨くための練り合い活動を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生きて働く「知識」について、中教審答申（平成 28 年 12 月）では、「子供たちが学ぶ過程の中で、新しい知識が、既に持っている知識や経験と結び付けられることにより、各教科等における学習内容の本質的な理解に関わる主要な概念として習得され、そうした概念がさらに、社会生活において活用されるものとなることが重要である。」と述べられている。これは、南魚沼郡市の理科部が追究していきたいことと一致している。生徒は、学習内容が断片的な理解にならないよう、学習した知識を使って自らの論を立て、他者に伝えるために表現し、他者の考えを聞いて論を更新していく。この学習方法によって、獲得した知識を活用し、それらを活用する楽しさや有用性を生徒が実感している姿を目指す。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

(1) 練り合いの活動（深い学びの技法⑩）

初発の論に満足するのではなく、グループ内や学級全体との対話を行うことで、自分の考えを更新し、よりよい論へと練り上げる手立てとする。また、その過程の中で、知識の学び直しや概念の深い理解も生まれると期待している。

(2) 学習モデルの活用（深い学びの技法⑭）

「粒子領域」で重要な見方である「質的・実体的な視点」を働かせて思考・表現させるために、操作可能なイオンのモデルを作成し、単元を通して活用する。

(3) 「振り返りシート」で、身に付けた資質・能力をメタ認知し成長に繋げる（深い学びの技法⑱⑲）

生徒自身が、何ができるようになったかを整理し、自身の学びを自覚（メタ認知）させたい。単に自然の事物・現象の原理を覚えるだけでなく、理科の見方・考え方を働かせながら、科学的に探究しようとする態度を養う。

7 1 年次の成果と課題

成果

- 「練り合い」の活動を通して、事象を説明する際に「どんなところが説明しにくいかな」、「辻褄が合わないと感じるところはどこか」を生徒自身が考え、自然な流れで話し合いが行われた。4 コマの場面を設定することで、コマ毎でのイオンの挙動の違いや「電離をするもの・しないものは何か」を練り合い、より現実に近い思考・表現に挑む生徒が見られた。

- 単元を通して、モデルを使用しながら実験の考察を行ったため、説明をスムーズに行う生徒が多く見られた。操作可能なモデルを使うことで、動かしながら違いを比較し、対話が生まれる場面も見られた。
- 記入した振り返りシートを授業中や考察などの際、随時見直すことができるため、既習事項の確認を行う生徒が多く見られた。シートを授業の終盤で使用するだけでなく、授業の途中に使用することで振り返りをより多くの機会に活用することができた。生徒は、学びの経過を振り返ることで、自分の成長や変化を自覚しやすくなり、次の学びに対する意欲が深まった。

課題

- △既習事項の定着に生徒間で差があり、練り合いの際に自分の意見や考えが不明瞭な生徒が一定数いるため、練り合いから生まれる深い学びにまで到達できない生徒も見られた。学級全体で、既習事項の確認を行い、生徒が練り合いに見通しをもって取り組めるようにしていく必要がある。
- △「深い学びの技法」を取り入れた授業づくりに焦点を当てたが、実際には1時間の授業では完結せず、単元をどのようにデザインするかが非常に大切であることを改めて感じた。特に「練り合い」をするためには、「練り合う」ための準備が必要であり、モデルを有効に活用できる状態にしておくことや必要な知識を必要な場面で引き出せる状態にしておくことが重要であり、この2点が今後の課題であると感じた。そのため、振り返りシートの使い方や使うタイミングを見直し、振り返りを生徒のより身近な存在にしていく必要がある。また、モデルを使う場面や振り返りを単元学習計画にどのように位置づけていくか、時数とのバランスなどの単元の構想が2年次のポイントになってくると考えられる。

8 運営の成果と課題

成果

- 郡市内の理科の先生方から協力していただき、プレ授業までに同じ指導案を使用して3回の公開授業を行うことができた。また研究推進委員内でのファシリテーションから、発問や条件設定を細かく見直し、指導案のブラッシュアップをすることができた。

課題

- △プレ授業の際、他地区の先生方にも来ていただけるような配慮ができなかった。今後は、オンライン等を積極的に活用しながら他地区との交流も行っていく。
- △派遣申請を早めに出す。

1 部会名 _____ 理科 _____

2 郡市名 _____ 南魚沼郡市 _____ 3 会場校 _____ 南魚沼市立六日町中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	中越教育事務所・指導主事	上村 貴雄
(2) 研究推進責任者	南魚沼市立塩沢中学校・教諭	高橋 悠太
(3) 会場校責任者	南魚沼市立六日町中学校・教諭	岡崎 一洸
(4) 県・郡市指導主事	南魚沼市学習指導センター・指導主事	宇佐美 宏保
(5) 研究推進委員(授業者)	湯沢町立湯沢中学校・教頭	山本 伸寿
	湯沢町立湯沢中学校・教諭	小宮山 弘毅
	南魚沼市立大和中中学校・教諭	小泉 徹也
	南魚沼市立八海中中学校・教諭	青木 一樹
	南魚沼市立塩沢中学校・教諭	下山 裕考

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5月30日/六日町中	3	・研究の進め方，方向性の確認
2	6月20日/六日町中	8	・研究推進委員会発足 ・指導案検討会①
3	8月29日/六日町中	9	・指導案検討会②
4	10月9日/八海中	9	・第1回公開授業・協議会（授業者 八海中 青木 一樹 教諭）
5	10月30日/大和中	9	・第2回公開授業・協議会（授業者 大和中 小泉 徹也 教諭）
6	11月6日/湯沢中	14	・第3回公開授業・協議会 兼 郡市教振公開授業 （授業者 湯沢中 小宮山 弘毅 教諭）
7	11月20日/六日町中	14	・ブレ授業・協議会（授業者 六日町中 岡崎 一洸 教諭）

令和 6 年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 間 英法
(学校名：新潟市立宮浦中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 理科
2 郡市名 新潟市 3 会場校 新潟市立下山中学校

4 研究主題
探究学習による深い学びの促進

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習指導要領の中学理科の目標は「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と記されている。そして、目指す資質・能力を育成する学びの学習過程には課題の把握（発見）、課題の探究（追究）、課題の解決という過程が示されている。

また、新潟県中学校教育研究会では、研究主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく生徒を育てる中学校教育」を設定している。その中で、「深い学びにいたる授業」を運営の重点に置き、生徒が「深い学び」にいたる過程において、教師が生徒の学びを最大限に引き出し、生徒の学びを支援する姿を求めている。

さらに、新潟市が目指す授業づくりとして、「単元デザインと「学習課題とまとめ、振り返り」、アウトプットのある授業の推進」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の推進」「授業と生徒指導の一体的な充実の推進」を行うこととしている。

よって、日々の授業において、主体的・対話的で深い学びの視点での授業改革を意識し、各校の生徒の実態に応じた探究の過程を積み重ねることで、新潟市中学校生徒全体の「深い学び」が促進され则认为る。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

まずは単元デザインをもって生徒の思考の流れ、内容や時間のまとまりを意識した授業づくりが必要である。その上で、探究の過程を踏まえた授業展開を行う。

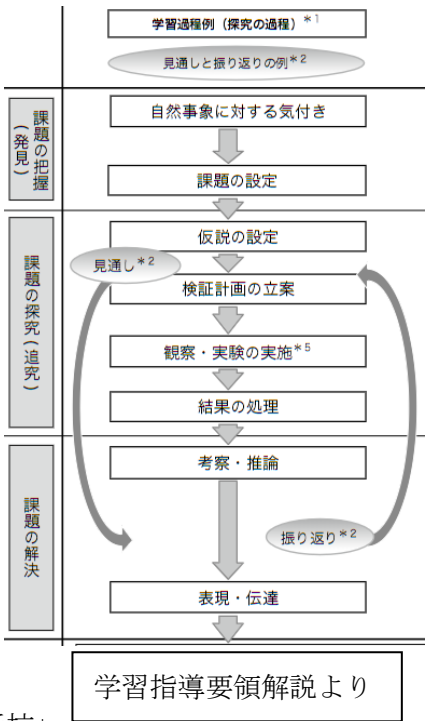
文科省が示す「探究の過程」は次の通りである。

- ① 課題の把握（発見）
- ② 課題の探究（追究）
- ③ 課題の解決

ともするとこれまでの授業研究は観察・実験を終えての考察・推論に重点を置いていた。

しかし、深い学びが成立するには、探究の過程における「課題の把握」で課題を生徒自身のものにすることと「課題の探究」で自分なりの仮説を立てられることと考えた。

今回の研究は中学2年「電流とその利用」における「電流・電圧と抵抗」



を扱っている。単元デザインとして電流の流れをモデルで考え、現象を説明できるような生徒の育成を目指した。

7 1年次の成果と課題

公開時の授業課題は①抵抗 1 個，②抵抗 2 個直列つなぎ，③抵抗 2 個並列つなぎを提示し，「豆電球が明るくなる抵抗器の繋ぎ方と，暗くなる抵抗器のつなぎ方を考えよう」を示した。

生徒は電流を右の粒子モデルで考え，粒子が落ちる様子から個人で仮説を立て，班で話し合い，発表。発表後に現象を見て，仮説を検証する活動を行った。

授業後，検討会で次の成果が上げられた。

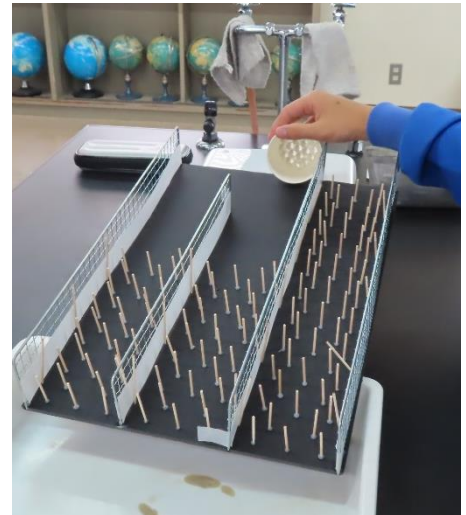
- ・モデルがわかりやすく，生徒が実験を通して，様々な手法を用いて，データを取り，比較し，他にわかりやすく説明しようとしていた。
- ・個で考え，班で協働して検討した。その際，意見が違っている方が個の意見が深まる。このサイクルが深い学びになる。始めは〇〇と考えたが，話し合い，××と考えるようになったと，そういった振り返りが生徒の中に見られた。

課題として次の点が挙げられた。

- ・課題が与えられたもので，みんなが調べたい課題，捉えやすい課題になっていたかというともう一工夫が必要である。
- ・考えを言語化する活動の練習が必要。言語活動，言語環境に目をやる必要がある。
- ・モデルがまだ生徒にとって使い勝手があまり良くないようで，もう少し使いやすいものにする工夫が必要ではないか。

電流をモデルとして表すことについてその長所と短所の吟味が必要。

→モデルについては再度，改善を重ねることとした。



8 運営の成果と課題

成果については次の点が挙げられた。

- ・授業公開を2回行うことができ，1回目の公開で生徒の思考や動きを確認できて有意義だった。
- ・何回も集まることができて，教材，単元，教具について意見交換を深めることができた。
- ・指導案検討を夏休みに2回できて負担が少なくて良かった。

課題については次の点が挙げられた。

- ・実験用のモデルを考える場の設定が難しい。委員各自で作成して互いに提案できたことは良かった。

1 部会名 _____ 理科 _____

2 郡市名 _____ 新潟市 _____ 3 会場校 _____ 新潟市立下山中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市立総合教育センター・指導主事	坂井 友紀
(2) 研究推進責任者	宮浦中学校・教諭	間 英法
(3) 会場校責任者 (授業者)	下山中学校・教諭	武藤 啓将
(4) 研究推進委員	石山中学校・校長	眞田 和徳
	東新潟中学校・教諭	渡邊 ひとみ
	山の下中学校・教諭	宇内 美桜里
	大形中学校・教諭	谷川 清一
	石山中学校・教諭	野上 貴浩
	藤見中学校・教諭	小松 健治
	木戸中学校・教諭	潤間 新一
	東石山中学校・教諭	大沼 陽子

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月5日／下山中	11	今年度の研究主題および研究の方向の確認
2	7月31日／下山中	11	指導案検討
3	8月28日／下山中	10	指導案検討，教材検討
4	9月18日／下山中	9	指導案検討，教材検討
5	11月19日／石山中	10	授業研修 石山中学校教諭 伊藤淳基 中2「合成抵抗」
6	11月27日／下山中	8	授業研修 下山中学校教諭 武藤啓将 中2「合成抵抗」
7	12月25日／下山中	8	教材検討
8			
9			
10			

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和 6 年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 佐藤 隆洋
(学校名: 村上東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 理科

2 郡市名 岩船郡村上市 3 会場校 関川村立関川中学校

4 研究主題

理科における深い学びにいたる授業 ～表現活動を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

学習活動の中で事象を説明する場面を設定し、その中で表現活動（アウトプット）を行わせる。事象を説明するためには既習事項を理解している必要がある。より良い説明を考える活動の中で、既習事項を活用しながら思考する場面を意図的に設定し、生徒同士が協働的に学び合えるようにする。自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いて自分の考えを修正したりすることで、生徒がより深い学びに至る授業を目指す。また、ICT 等を活用しながら、協働的に表現活動を行うことによって、生徒たちのよさや可能性を引き出したい。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（以下、活用する深い学びの技法 5 つ）

〈思考⑧〉異なる多様な考えを比較して考える

〈解決⑨〉学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする

〈解決⑩〉仲間と練りあいや練り上げをする

〈表現⑭〉学習モデルを活用して思考や表現をする

〈評価⑱〉身につけた資質・能力をメタ認知し成長につなげる

学習活動における事象を説明する場面において、4 人班で 4 コマ漫画を用いた協働的な表現活動を行う。4 コマ漫画は 1 人が 1 コマを担当し、前後のコマを担当する生徒と連携を取りながら作成を行う。4 コマ漫画はタブレットのスライドで作成することも紙やホワイトボード等を使って作成することも可能であるが、状況によって最適な方法をとるのがよいと考えられる。例えば、電気クラゲを塩ビパイプで浮かせるという事象を説明する場合、4 人で話し合い、それぞれのコマでどこまでを説明するのか決めるというのが最もよいが、①電気クラゲと塩ビパイプをペーパーでこする前、②電気クラゲをペーパーでこすった時、③塩ビパイプをペーパーでこすった時、④電気クラゲが浮いた時というように教師側でそれぞれのコマでどこまで説明するのかを指定すると、活動が進めやすくなったり、時間が大幅に短縮されたりすると考えられる。このような活動を行うことで、4 コマの流れを頭の中で理解している生徒もアウトプットで情報が整理され、1 人では表現ができない生徒は周りの生徒の力を借りて、課題を解決することができる。

7 1年次の成果と課題

研究授業では、塩酸と塩化銅の電気分解で起きている事象を、4～5コマでホワイトボードを使って説明していた。ホワイトボードを使ったことで情報の整理や修正がしやすく、間違いも把握しやすかった。班内で知識の共有をしながら4コマの作成を進め、分からないところも他の人に聞きながら活動をしている姿があった。ホワイトボードを使った4コマ漫画の作成は表現活動の手段として十分に成り立っていた。ただ一方で作成に時間がかかるという面があり、授業内で各班の結果を共有することができなかった。改善案としては、既有知識を入念に復習しておく、4コマの最初と最後のコマを指定しておき、その間の過程を考えさせる（より考えさせるところを絞る）などが挙げられた。この改善案を今後の授業で実践していく。

8 運営の成果と課題

7月の公開授業、8月の理科教育センターとの共催の研修、11月の公開授業と研修の機会が充実していたことが成果として挙げられる。課題としては、4コマ漫画の作成を通した表現活動を研究推進委員会以外の郡市の理科教員に十分に周知することができず、実践の例が不足した状態でプレ授業を迎えてしまったことが挙げられる。そのため、来年度の2年次の公開授業に向けては、郡市の理科教員に4コマ漫画の実践方法をさらに周知し、各校で実践をしてもらい、その結果を集約することで指導案の改善を行っていききたい。

1 部会名 理科

2 郡市名 岩船郡村上市 3 会場校 関川村立関川中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	下越教育事務所・指導主事	鈴木 淳
(2) 研究推進責任者	村上東中学校・教諭	佐藤 隆洋
(3) 会場校責任者	山北中学校・教諭	村田 健
(4) 研究推進委員(授業者)	神林中学校・校長	横山 雅史
	神林中学校・教諭	渡邊 響
	朝日中学校・教諭	富樫 英夫
	山北中学校・教諭 (2年次授業者)	相馬 亮
	関川中学校・教諭 (1年次授業者)	兼田 朋廣

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/28/神林中学校	4	研究主題の決定、研究の進め方について
2	7/8/村上第一中学校	7	村上第一中学校の富田教諭による公開授業及び検討会 今後の研究の進め方について
3	7/29/神林中学校	6	11/12のプレ授業に向けた検討
4	8/19/村上市理科教育センター	6	朝日中学校の富樫教諭による「光の性質」の指導計画例や教材などの紹介、山北中学校の相馬教諭による「電流の正体」の指導計画例や教材などの紹介 11/12のプレ授業に向けた検討
5	10/9/神林中学校	6	11/12のプレ授業に向けた検討
6	11/12/関川中学校	7	関川中学校の兼田教諭による公開授業及び検討会
7	11/20/神林中学校	6	11/12の授業の振り返り 1年次の経過の概要報告書の内容の検討
8	1/22/神林中学校	5	今年度の研究の振り返り 来年度の研究についての検討

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 森 瑤子
(学校名: 糸魚川市立糸魚川東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 英語

2 郡市名 糸魚川

3 会場校 糸魚川市立能生中学校

4 研究主題

理由や根拠をもち、自分の考えや意見を表現できる生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

市内の生徒の実態として、「できる」と感じる関心のある話題のペアやグループ活動に意欲的に取り組むことができています。しかし、多くの生徒が社会的な話題をテーマにした言語活動において、自らの考えをもてないなど粘り強く学習に取り組めていないことが課題である。そのため、本研究では自分の考えや意見をもつために、どうしてそう思ったかその理由や根拠を主体的に思考し表現できる生徒の育成を目指す。

また、英語科における深い学びの姿を、言語活動においてコミュニケーションにおける目的や場面、状況に適した内容・言語の表現を主体的・対話的に模索する姿とし、次に示す方法で研究をしていく。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

（1）協働（協同）学習

（「深い学びの技法」一解決「⑩仲間と練り合いや練り上げをする」思考「⑧異なる多様な考えを比較して考える」）

- ① 他者との関わりの中で、個の学習では気づくことができなかった内容や言語に触れることができる。
- ② オープンクエスチョンを使い、相手の話を引き出したり、何でも話せる雰囲気をつくったりする。
- ③ 自分の考えをそもそももてるように、生徒が興味関心のあるトピックでの活動や、自分の考えを否定されないやり取り（オープンクエスチョン、やり取りの中でのリアクションなど）といった思考力・判断力・表現力等を高める活動につながるトレーニングも仕組んでいく。

（2）思考を深める教具の活用

（「深い学びの技法」一表現「⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる」「⑯要素的な知識や知見を構造化・モデル化する」）

- ① 思考ツールを用いて、自分の考えや意見、その理由を可視化し、整理する。
- ② ホワイトボードを使い「言えなかった表現」や、話したことを書き表現力を高める。タブレットや紙のノートに比べて、より気軽に「書き」まとめることができる。

（3）課題設定の工夫、導入の工夫

（「深い学びの技法」一設定「③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする」）

- ① 単元の目標として、コミュニケーションにおける目的や場面、状況を明確にしたタスクを設定

する。

② 単元の目標との関わりのある言語活動を毎時間設定する。

③ 単元の学習前と、単元末で学習が終わった時の変容を見取る。(何ができるようになったか)

7 1年次の成果と課題

<成果>

・協働（協同）学習を充実させることは、①他者から学ぶ ②考えを深める ことに有効であった。何を考えたら良いか内容すら浮かばない生徒も、仲間のアイデアにふれ、自分の考えや意見を何とか生み出そうとする姿が見られた。役割分担等明確にし、さらによりよい協働（協同）学習にしていく。

・今年度はホワイトボードの使い方を研究することができた。ICT やノートよりも「何よりも気軽に書ける」ことが強みであり、発話をいかに文字に残すかという面での有効性が感じられた。自分の考えや意見をブラッシュアップするのにふさわしい教具であった。また、ICT を活用して「学びの蓄積」ができるものの提案がなされた。学習課題によってはホワイトボードよりも ICT でメモをしたり、情報を蓄積したりすることが有効な場合もあるので、さまざまな教具を用いて授業を実践していく。

<課題>

・「③課題設定の工夫、導入の工夫」には課題がある。タスクに対する場面設定はあるものの、「相手は誰？」「なんのため？」に行う活動なのか曖昧だったり、行う必然性がないと感じられる活動になってしまったりしていた。これら学習課題における「相手意識」や「目的」が明確なものとなれば、生徒の活動への意欲向上やさらなる成長の姿が期待できると考える。

・学習課題へのアプローチにも課題がある。生徒が課題に対して困難さを抱かないよう、教師が先回りしすぎている。生徒が「なんて言ったらよいだろう」「これが言いたいけれどもわからない」といった困難さを抱える場面がないと、深い学びにいたる授業とはいえない。

・いかに深い学びを実現する授業をするかを考えたい。これら3つの手立てだと、深い学びの手立てとしては不十分であるかもしれない。そもそも協同学習は学習のベースとしてあるもので、そこに新たな手立てを考えていくべきであった。来年度は学びの深まりをもう少し考えたい。

8 運営の成果と課題

・公開授業での実践や反省が、次の公開授業で生かされていないことが多かった。研究のつながりがもっとあるとよいので、早いうちに日程を定め、次の授業者が確実に参加できるようにする。研究のリレーを意識する。

1 部会名 _____ 英語 _____

2 郡市名 _____ 糸魚川 _____ 3 会場校 _____ 糸魚川市立能生中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	上越教育大学・教授	大場 浩正
(1) 指導者	上越教育事務所・指導主事	久保 成毅
(2) 研究推進責任者	糸魚川市立糸魚川東中学校・教諭	森 瑤子
(3) 会場校責任者	糸魚川市立能生中学校・教諭	石野 佑紀枝
(4) 研究推進委員(授業者)	糸魚川市立青海中学校・校長	平野 克之
	糸魚川市立青海中学校・教諭	荒木 俊邦
	糸魚川市立糸魚川中学校・教諭	古川 和恵
	糸魚川市立能生中学校・教諭	関澤 妃菜多

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/18 (火) ／ 糸魚川東中学校	6	顔合わせ、計画の作成、研究主題
2	7/25 (木) ／ 糸魚川東中学校	6	研究主題、目指す深い学びの姿の検討
3	9/ 4 (水) ／ 能生中学校	7	関澤教諭公開授業、協議会
4	10/30 (水) ／ 糸魚川中学校	6	古川教諭公開授業、協議会、1年次発表の指導案検討
5	12/ 4 (水) ／ 青海中学校	7	荒木教諭公開授業、協議会
6	12/19 (木) ／ 糸魚川東中学校	6	今年度のまとめ

令和 6 年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1 年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 渡邊 未緒
(学校名：加茂市立須田中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 英語

2 郡市名 加茂市南蒲原郡 3 会場校 田上町立田上中学校

4 研究主題

目的・場面・状況に応じて、伝えたい内容を適切な表現を用いて伝えようとする生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

加茂市・田上町の英語の先生方で生徒の現状と課題について話し合った。どの学校においても、生徒は概ね意欲的に学習に取り組んでいる様子がある。しかし、特に「書く」「話す」の言語活動では、練習を通して身に付いてほしい表現がなかなか正しくアウトプットすることができないという課題が多く、多くの学校で見られる。そのため、授業内で学習した表現を言語活動で正しく表現できることを目指し、本主題を設定した。より正確に目的・場面・状況に応じて表現できる生徒を「目指す生徒の姿」とした。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

単元を導入する際、生徒が見通しをもって学習に取り組めるよう、学習モデルを提示する。学習モデルに近づけるよう、仲間の表現を自分の表現に生かしたり、個の学習を互いに協力してより伝わりやすい表現に練り上げたりする場を設ける。また、スモールトークを深い学びの技法として授業に取り入れ、スモールトークを行う際に、まずは教員がモデルを示し、生徒に話す内容をイメージさせる。その後、生徒と教員のやりとりでさらにイメージを膨らませ、自信をもって話せるよう仕向ける。そして生徒が伝えたいことをキャッチし、中間指導で、共通理解を図ったり、気になる文法事項を確認したりし、より良いやりとりになるよう指導する。

これらを推進委員が各校で実践し、有効だった点や課題を協議し、研究を進めている。

7 1 年次の成果と課題

初回の推進委員会では、推進委員の勤務校での課題を出し合った後、加茂市・南蒲原郡の中学校において共通して課題となっていることについて、意見交換を行った。委員は全体の課題を自分事として捉えながら積極的に改善案について相談した。2 回目の推進委員会では、小学校の英語授業担当者を交えて相談する機会も設け、小学校の視点から、特にスモールトークの重要性について貴重な意見をもらうことができた。そこで、以後スモールトークについて協議を重ね、より効果的で有効なスモールトークの進め方を考えた。最後の推進委員会では、2 年次の研究に向け、1 年次後半から 2 年次初回の推進委員会までに、各校でスモールトークを中心として「話すこと」の技能を「書くこと」の技能の向上に生かす方策について実践していくこととした。

8 運営の成果と課題

推進委員がとても協力的であり、推進委員会は毎回スムーズに進んだ。しかし、運営を責任者 1 人で行ったため、負担感が大きかった。来年度は分担していきたい。

1 部会名 英語

2 郡市名 加茂南蒲 3 会場校 田上町立田上中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	燕市立吉田中学校・教頭	川田 昌宏
(2) 研究推進責任者	加茂市立須田中学校・教諭	渡邊 未緒
(3) 会場校責任者	田上町立田上中学校・教頭	木原 貴徳
(4) 県・郡市指導主事	加茂市立教育委員会・指導主事	廣野 達也
(5) 研究推進委員(授業者)	田上町立田上中学校・教諭	伊藤 エリカ
	田上町立田上中学校・教諭	石山 亨
	田上町立田上中学校・教諭	貝津 光恵
	加茂市立加茂中学校・教諭	渡邊 美穂子
	加茂市立葵中学校・教諭	竹石 真由子
	加茂市立七谷中学校・教諭	吉武 裕子
	加茂市立若宮中学校・教諭	高橋 裕美
	加茂市立須田中学校・教頭	渡邊 邦博

5 研究推進委員会の実施日，参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月28日／田上中学校	9	第一回 推進委員会 主題の決定
2	8月22日／須田中学校	11	第二回 推進委員会 及び 加茂市学校教育研究協議会 研修会 プレ授業 指導案検討
3	9月12日／田上中学校	12	第三回 推進委員会 各校での取り組みについて意見交換
4	10月29日／田上中学校	15	第四回 推進委員会 プレ授業参観及びプレ授業について意見交換
5	12月5日／田上中学校	8	第五回 推進委員会 来年度に向けて

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 風間 皓介
(学校名: 新潟市立寄居中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

- 1 部会名 英語部
- 2 郡市名 新潟市 3 会場校 高志中等教育学校、小須戸中学校

4 研究主題

つながりのある言語活動の中で、
表現を広げ、学びを深めていく生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

新潟市中教研英語部では、昨年度まで「主体的に学び合う生徒の育成～4技能5領域における思考力・判断力・表現力を高める指導を通して～」を主題として研究を進めてきた。

研究の成果として、新潟市は授業におけるタブレット端末の活用率が全国でもトップクラスであり、英語部でも多くの授業でデジタル教科書や様々なアプリケーションが効果的に活用されている場面が見られる。生徒たちもタブレット端末を使用することで、主体的に学習に取り組む様子が見られるなど、導入前にはなかった姿がどの学校でも見られるようになってきている。

また、4年ぶりに対面での開催となった一斉研修の公開授業では、どの授業でもペア活動やグループ活動が活発に行われ、生徒同士が学び合う様子が見られた。これは、新潟市の英語科職員の指導技術が向上していることに加え、各学校で、新潟市がその重要性を掲げている「支持的風土」が全教育活動を通して醸成されていることも一つの要因だと考える。

一方で、生徒同士のやり取りが事実を伝えるレベルに留まっていたり、「自分」を含めずに表現していたりするなど、学習の「深まり」という点では課題が見られる。

そこで今年度は、研究主題を「つながりのある言語活動の中で、表現を広げ、深めていく生徒」とし、昨年度までの「主体的な学び」や「対話的な学び」で成果があった研究を「深い学び」へとさらに一歩前進させたい。

そのために、新潟市中教研英語部が目指す「深い学び」の具体的な姿を、先行実践を行なっている学校や、外部講師からの模擬授業などを通して市内全体で共有すると共に「関連付け」、「活性化」、「探究」の3つを「深い学び」を実現するための具体的な手立てとして設定する。共通のゴールに向かって、推進校が行うリレー授業をはじめ、市内全校が実践を行い、11月の一斉研修でその成果を持ち寄り、授業を見合い、協議会で語り合うことを通して、新潟市全体で研究を進めていきたい。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

- ① 教科書の題材、単元末課題等について、個々の経験と関連性を持たせるなどし、興味関心を高める（知識の関連付け）
- ② 獲得した知識・技能を活用し、生徒同士で発表したり、やり取りしたりする（知識の活性化）
- ③ 単元末課題等に向け、自分の考えについて発表や、やり取りをしながら、考えを広げ、深めていく（探究）

7 1年次の成果と課題

昨年度は、授業で扱う時間が一番長いものの、これまではあまり研究対象としてこなかった教科書を活用することをテーマとして研究を進めた。

しかし、「どのように」教科書を活用するかについて、明確な方向性がなく、研究が深まらなかったことが課題であった。

このような反省から、今年度は、県中教研の研究主題である「深い学び」と教科書を活用した取組を関連付けるため、昨年度末から幹事で何度も議論を重ね、研究主題、手立てを設定し、研修をスタートさせることができた。

5月の幹事会では、2名の授業者から、11月の一斉研修で行う授業の構想を話してもらい、幹事全体で共有した。

7月から9月にかけて、その構想をもとに、研究推進校5校で公開授業を行なった。授業後は、その日の授業に関する検討会を行なった後、一斉研修の指導案検討を毎回少しずつ進めていった。一斉研修に向けて、授業者と指導者、幹事で、時間をかけて議論をすることができた。

また、今年度は、新たな取り組みとして、夏季休業中に、新潟市の採択教科書の執筆者でもある群馬大学 津久井 貴之様を招き、「深い学び」についての講演や実践を紹介していただくことができた。英語科での「深い学び」とは何か、ぼんやりとしていたイメージが、講演を通して明確なものとなった。

2年次の研究に向けて、「深い学び」について、より具体的なイメージと手立てについて、新潟市中教研英語部全体で共有することが課題である。

8 運営の成果と課題

上記のように、5月に授業者の授業の構想を幹事全体で共有し、7月から9月のリレー授業を行なったことで、11月の授業に向けて、新潟市中教研英語部全体で研究を進めていくことができた。

一斉研修では、公開授業、その後の授業に関する協議会については、事後アンケートで概ね肯定的な評価な評価だった。

一方で、各校が「深い学び」に関する実践を持ち寄って行なった協議会では、持ち寄る実践の内容や形式に関する説明が不足していたりしたことで、混乱を招いたり、負担感を感じた部員もいた。来年度は、年度当初にこれらを明示し、部員が負担感を感じずに参加できるようにする必要性を感じた。

一斉研修全体を通して、公開授業、各校での取り組みについて、どのグループでも闊達な議論が飛び交う様子を目の当たりにし、部員が一堂に会し、授業を参観し、協議を行うことの意義は大きいと感じた。

2年次の公開授業に向けて、今年度の成果と課題をもとに、授業者、指導者、幹事全員が議論を重ねながら、英語科の「深い学び」のあり方を模索していきたい。

1 部会名 英語部

2 郡市名 新潟市 3 会場校 高志中等教育学校、小須戸中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟市教育委員会学校支援課 指導主事	齋藤 まゆみ
(2) 研究推進責任者	新潟市立寄居中学校 教諭	風間 皓介
(3) 会場校責任者	新潟市立高志中等教育学校 教諭	佐藤 一輝
	新潟市立小須戸中学校 教諭	田中 聡子
(4) 県・郡市指導主事	新潟市立総合教育センター 指導主事	佐藤 優子
(5) 顧問	新潟市立光晴中学校 校長	大岩 樹生
	新潟清心女子中学校 校長	大上 喜彦
(6) 研究推進委員	新潟市立白新中学校 教諭	橋本 千裕
	新潟市立石山中学校 教諭	安宅 いずみ
	新潟市立新津第二中学校 教諭	梁川 暁男
	新潟市立下山中学校 教諭	山崎 寛己
	新潟市立大形中学校 教諭	高尾 早彩
	新潟市立内野中学校 教諭	室橋 幸介
	新潟市立横越中学校 教諭	藤原 壮利
(東地区会場校・授業者)	新潟市立高志中等教育学校 教諭	小林 尚登
(研究推進校)	新潟市立新潟柳都中学校 教諭	櫻井 梢
(研究推進校)	新潟市立宮浦中学校 教諭	横野 紀雄
(研究推進校)	新潟市立寄居中学校 教諭	金子 尚美
(西地区会場校・授業者)	新潟市立小須戸中学校 教諭	武者 ひとみ
(研究推進校)	新潟市立金津中学校 教諭	広野 かおり
(研究推進校)	新潟市立新津第五中学校 教諭	富所 宏子

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	5/23 光晴中学校	20	研究テーマ、日程の確認等
2	7/2 金津中学校	8	公開授業① 広野かおり 教諭 2年生 Lesson 3
3	7/12 新潟柳都中学校	6	公開授業② 櫻井 梢 教諭 3年生 Lesson 3
4	7/16 宮浦中学校	8	公開授業③ 横野 紀雄 教諭 3年生 Lesson 3
5	8/1 夏季研修	60	研究主題に関わる講演 講師 群馬大学 津久井 貴之 様
6	9/24 新津第五中学校	7	公開授業④ 富所 宏子 教諭 3年生 Lesson 4
7	9/27 寄居中学校	9	公開授業⑤ 金子 尚美 教諭 2年生 Lesson 4
8	10/24 光晴中学校	20	一斉研修 事前打ち合わせ

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 徳永 友也
(学校名: 佐渡市立相川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 英語部会

2 郡市名 佐渡市

3 会場校 佐渡市立相川中学校

4 研究主題

深い学びにいたる授業
～「深い学びの技法」を基に、生徒が自身のよさや可能性を伸ばしていく学びを通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

昨年度、佐渡市中学校教育研究会の重点課題は、「見方・考え方を働かせ、深い学びにいたる授業改善～学び合う授業を通して～」であった。「深い学びにいたる」授業を目指し、創意工夫や試行錯誤を繰り返し、「深い学び」を追求した。「深い学び」にいたる授業の質を高めるには、教科で共通した手立てを構想し、その有効性についてより一層具体的に検討していく必要があるという課題があげられ、今年度は田中博之氏の「深い学びの技法」を共通の手立てとなるよう研究主題を設定した。「深い学びの技法」とは、生徒が高度な思考操作や認識の仕方などができるようになるための「学び方」であり、生徒が技法を活用しながら主体的に課題解決に取り組む姿を目指す。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

佐渡市の研究推進委員会では、6月に研究主題を決定・共有し、7月に1年次授業公開の授業案を検討し、8月に「深い学びにいたる」授業の実践事例を共有した。その後、研究推進委員一人一人が「深い学びの技法」を活用した授業を構想し、互いに授業を公開し合った。具体的には、最初に目指す「深い学びにいたる生徒の姿」や、生徒のよさや可能性をどのように授業で生かして引き出すかを考えた上で、「深い学び」の技法を基に手立てを構想し、「深い学びにいたる生徒の姿」に迫るようにした。そして、研究授業を実施し、協議会で「深い学びにいたる生徒の姿」に迫ることができたかどうか、そのための手立てとしての「深い学び技法」の有効性について協議し、研究主題に迫った。9月以降、「リレー形式」で研究授業を計5回実施した。

7 1年次の成果と課題

成果としては、「深い学びの技法」や「深い学びにいたる生徒の姿」について理解が深まったことが挙げられる。何となく授業しているのではなく、技法を授業に意識的に取り入れ、深い学びを促したり再認識できたりする機会となった。また、「リレー形式」で研究授業を重ねていくことで、それぞれの教員が当事者意識をもって研究に取り組み、前の研究授業での学びを次の研究授業に有機的につなげていくことができた。

課題としては、「リレー形式」の研究授業では単元・学年・領域・深い学びの技法がそれぞれ異なっており、焦点を絞った研究ができなかったことが挙げられる。また、1年次授業公開に向けた協議が十分に行えなかったこともあり、授業者へのサポートや協働体制が足りない部分があったことである。

8 運営の成果と課題

成果としては、究推進責任者を中心に、研究主題に迫るための手立てを構想し、1年次の研究運営が円滑に行われた。また、新潟県立教育センターの指導主事に指導者を務めていただくとともに、や佐渡市教育委員会の指導主事からもご協力いただき、連携しながら授業構想の検討や研究授業の振り返りを行うことができた。

課題としては、研究推進責任者や1年次公開授業者への負担が大きかったことが挙げられる

2年次も今年度と同様の研究主題を設定し、「深い学びの技法」を活用した「深い学びにいたる」研究授業を「リレー形式」で行っていく。具体的には、研究授業の授業者は、今年度の授業者（学校）とは違う教員（3～5名）が担い、「深い学びの技法」を活用した「深い学びにいたる」授業のより一層の理解と浸透を図る。一方で、研究授業の領域は、2年次公開授業の授業者の意向を踏まえ、「書くこと」に絞って行っていく。さらに、研究授業の協議会では、「子どもの姿をもとにした本授業の振り返り→次回の研究授業の検討→2年次授業公開の検討」の順で進め、授業者のサポートを重ねていく。

以上のことに取り組みながら、日常生活と関わりがあり、自分の中に落とし込めるような題材や手立てを大切にしながら、他の教員が真似したくなるような授業を佐渡から提案していきたい。

1 部会名 英語部会

2 郡市名 佐渡市 3 会場校 佐渡市立相川中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	県立教育センター・指導主事	袖山 司
(2) 研究推進責任者	相川中学校・教諭	徳永 友也
(3) 会場校責任者	相川中学校・教頭	恩田 隆介
(4) 県・郡市指導主事	新潟県立教育センター・指導主事	袖山 司
(5) 研究推進委員(授業者)	相川中学校・教諭	安田 夏怜(授業者)
	両津中学校・教諭	小黒 淳一
	両津中学校・教諭	小林 裕稀
	畑野中学校・教諭	高橋 民陽
	佐和田中学校・教諭	齋藤 繁行
	南佐渡中学校・教諭	石川 卓也

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/17 相川中学校	8	1年次における研究推進委員会の日程調整、研究主題の決定・共有
2	7/26 畑野中学校	9	1年次の授業実践に向けた指導案検討、Class 原稿の作成
3	8/20 両津中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践事例の共有
4	10/18 両津中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践(2年生、授業者・小林裕稀)
5	11/1 相川中学校	10	1年次プレ授業公開と協議会(3年生、授業者・安田夏怜)
6	11/22 佐和田中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践(1年生、授業者・齋藤繁行)
7	11/28 南佐渡中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践(1年生、授業者・石川卓也)
8	12/18 畑野中学校	9	「深い学びにいたる授業」の実践(2年生、高橋民陽)
9			
10			

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 安中 美香
(学校名：柏崎市立東中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 音楽

2 郡市名 柏崎市・刈羽郡

3 会場校 柏崎市立北条中学校

4 研究主題

深い学びにいたる、豊かな音楽性を育む授業

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

(1) 主題設定の理由

上越音楽教育研究会の研究主題は【感じる つなぐ 広がる】である。この研究主題には、音楽と出会った生徒がその音楽への興味関心を高め、主体的・対話的で深い学びにつながる一貫した学習課題に向かうとともに、音や音楽を介した言語活動充実させることにより、音楽のよさや美しさを感じ、生涯に渡って音楽を愛好する心情を育むというねらいが込められている。これらと、県中教研の研究主題、さらには、教科・領域担当校の生徒の実態を受け、上記の研究主題を設定した。

(2) 目指す深い学びの姿

研究推進委員会では、中教研の目指す「深い学び」の姿を「自身のよさや可能性」を引き出し、「生徒の音楽的な自立」が促される学びと位置付け、音楽的な資質の向上と生徒一人一人が輝く授業づくりの具体化を目指した。

- ① 歌唱領域での学習において、互いの演奏を聴き合い、改善点やより深い音楽表現を追求し、よりよいアンサンブルをつくり上げる授業の構築。
- ② 楽譜から深く読み取ったことや、歌ったり聴いたりして音楽から体験的に感じたことを生かして、強弱やフレージング、言葉との関係など、具体的な表現活動につなげる。その際、音を磨く過程（発声・発音・処理・音高・音価）にも着目させ、音楽を様々な角度から練り上げる力を育む。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

(1) 深い学びの技法の設定

本研究は歌唱表現の練り上げにおいて、初めは教師が授業モデルを示し、次第に生徒の手にゆだねながら最終的に生徒の音楽的な自立を目指すものである。「深い学びの技法」手立てとして活用し、教師が身に付けるばかりでなく、生徒も身に付け、生徒が手立てを講じることができるようにしたい。「深い学びの技法20」から、本研究において手立てとして講じる技法について検討し、解決に特化して以下の技法を設定した。

- 学んだ知識や技能を活用し、どのように工夫すればよいか試行錯誤しながら、歌唱表現をする。
- 楽譜から深く読み取ったことを実際の音や音楽から感じ取ったことと関連付けて表現する。

- 仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げる。

(2) 授業構想の検討

手立ての具体化及び深い学びの技法のピックアップから、領域と題材の設定を行い、指導計画の作成と指導案検討を重ねた。1年次の発表では、これまでの学習で獲得した知識や技能を活用し、曲の旋律の特徴や声部の役割、歌詞の内容との関係について深く捉えながら、協働して創意工夫を生かした歌唱表現を練り上げることを目指した。これまでの学びを生かし、豊かに表現するための学習を展開する。

7 1年次の成果と課題

(1) 成果

教科領域担当校の生徒数や実態に即した内容・構想で1年次の研究が進められたことは、大変有意義であったと感じている。発表当日は、生徒が10人なのに対して参観者が15人であったが、臆することなく、堂々と授業に臨む姿が見られた。また、これまでの指導の成果により、楽譜を読み取る力が付いたことや、生徒が前時の学びが生かし、根拠を示して発言することができたこと、授業者の観点を生徒が概念化、言語化し、自分の観点を構築するためのこれまでの発想にないワークシートの提案ができたこと、楽譜を共有する対話が素晴らしかったこと等が成果として挙げられる。

(2) 課題

生徒が感じたことや思いを言葉で表現できるようになるためには、継続的な訓練が必要なので、音楽の時間に限らず、学校生活の様々な場面での指導を連携させることが重要であると感じた。また、豊かな音楽性を育むためには、楽譜の読み取りの力と音楽的な感受が対等にある中で、自身の思いや感じ取ったことを言語化し、深い表現へつなげていけるようにすることが課題であるとする。生徒の音楽的な自立を促すため、内生的に生じた感覚にどう気付かせるか、構造・表現技法を概念化・身体化することが課題であり、今後継続して取り組みたい。

8 運営の成果と課題

(1) 成果

研究推進委員および、当該学校の管理職、教科領域担当校ともに、当活動へのご理解とご協力を賜り、充実した「研究推進委員会」を実施することができた。また、ご指導いただいた伊野先生からも、ご多用の中、授業者とデータ等のやり取りでご指導を重ねていただき、不安なく、発表会当日を迎えることができた。

(2) 課題

今年度はプレ発表であったため、研究発表会の案内を柏崎市・刈羽郡内の中学校のみに発送としたが、参加者が少なく、ほぼ、研究推進委員に+α程度となってしまった。昨今の教員不足により、柏崎市・刈羽郡の中学校では、音楽の教諭が非常勤講師だったり再任用であったりする学校も数校あり、参加ができない学校も見られた。来年度の本発表に向けては、郡市外へも幅広く案内し、多くの方々からご参加をいただき、ご指導を仰ぎたいと考えている。

1 部会名 _____ 音楽 _____

2 郡市名 _____ 柏崎市・刈羽郡 _____ 3 会場校 _____ 柏崎市立北条中学校 _____

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学 名誉教授	伊野 義博
(2) 研究推進責任者	柏崎市立東中学校・教諭	安中 美香
(3) 会場校責任者	柏崎市立北条中学校・教頭	室 稔
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員(授業者)	柏崎市立北条中学校・教諭	小林 良輔
	柏崎市立第一中学校・教諭	樋口 恵理子
	柏崎市立第二中学校・教諭	沼岡 恵里
	柏崎市立鏡が沖中学校・教諭	長 環
	柏崎市立西山中学校・教諭	今井 隆子

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月17日 ワークプラザ柏崎	6	研究の方向性・研究主題についての検討
2	8月7日 柏崎市立北条中学校	6	研究主題の設定・研究方法等の検討
3	9月25日 柏崎市立北条中学校	6	指導案検討
4	10月16日 柏崎市立北条中学校	6	指導案検討
5	11月28日 柏崎市立北条中学校	6	プレ授業公開・協議会 1年次のまとめ

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 関 裕子
(学校名：新潟市立木戸中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 音 楽

2 郡市名 新 潟 3 会場校 新潟市立新津第一中学校 (R7)・新潟市立鳥屋野中学校 (R6)

4 研究主題

感性を働かせて、仲間と共に音楽に関わり続ける生徒の育成

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

生徒は、思いや意図をもって表現を追求したり、感じ取ったことを基に音楽のよさを見いだしたりする活動を通して、主体的に音楽に親しんでいる。また、思いや感じ取ったことをお互いに交流し合うことを通して、仲間と共に音楽のもつよさを明らかにしようとしている。

これまでの音楽科の実践を基盤に、感性を働かせて主体的に音楽に関わる活動を通して、曲想、音楽の構成や仕組み、音楽の背景などを関わらせて、音楽のもつよさや価値を明らかにしていく生徒を育成したいという願いから、この主題を設定した。

目指す深い学びの姿に近づくために、習得・活用・探究という学びの過程の中で、音楽科の「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解させ、思いや意図をもとに他者と協働しながら音楽表現を追求する場面を設定した。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

目指す深い学びの姿にもあるように、生徒が習得した知識を自ら活用し、仲間との関わりの中でさらに理解を深めたりするような活動を通し、主体的に音楽と関わり続ける生徒の育成を目指す。

そのために、「課題を設定する場面」「思考する場面」「表現（アウトプット）する場面」に重点を置き、目指す生徒の姿に迫りたい。早稲田大学教職員大学院の田中博之教授が提唱する「深い学びの技法」から以下の課題設定を研究の中心の手立てとし、生徒の主体的な姿を引き出す実践へ繋げたい。

① 課題設定：「視点・観点・論点を具体的に設定し、思考や表現に繋げる」

教師が課題を設定する場面において、「何を考えればよいのか」「どのような視点で考えればよいのか」を明確にすることで、生徒の学びの方向性をしっかりと定める。そのためには、自己調整学習など自立して学ぶ力が求められる。音楽を苦手とする生徒が「進んで学びたい」と思えるように、教師が具体的な視点を分かりやすくして課題を与えるなどの工夫をしたい。

② 思考場面：「仲間と協働し、資料やデータに基づいて考察したり検証したりする」

音楽における鑑賞や創作活動の際に、より多くの資料やデータを教師が準備し提供することで、生徒が自ら必要なものを選択・応用し、課題解決に近づこうとする姿を目指す。そのための生徒への手立てとして「見方・考え方」を働かせるために、資料やデータに基づいた考察や検証をすることに重点を置き、それらの活動を他者と協働して行うことで、様々な価値観に触れさせ、深い学びへと繋げたい。

③ 表現場面：「理由や根拠を示して論理的に説明する」

生徒が学んだことを表現（アウトプット）する場面において、自らの言葉で学んだことを整理し、まとめる場面を設ける。その際、理由や根拠を示すことを意識させ、物事の道筋や考え方をはっきりさせる論理的な思考を促す。また仲間との音楽活動を通して様々な意見や感想、評価を得ることで自らの思いや意図を論理的に表現する力をのばし、聴き手に伝わる表現力を向上させていきたい。

7 1年次の成果と課題

○1年次授業公開にむけて

- ・今年度 R6 1年次は鳥屋野中学校を会場に、今井 優太教諭の創作の授業を基に研究を進めた。創作の授業が、ただ曲を創ればよいだけの授業にならないように、創作の活動が意図をもって音楽を作り出す喜びを感じ取れるように、そして「表す」「聴く」「考える」の活動サイクルを通して、音楽の知識や技能を生かしながら、音や音楽に対する感性を育むことができるような授業構成を目標として研究に取り組んだ。
- ・創作した旋律が機械的な音の羅列ではなく、まとまりのある創作表現になるように、いくつかの条件を示して創作に取り組んだ。また記譜や音楽の再現性の問題を少しでも解決するために iPad 内アプリ Garage Band を活用し、下記のような条件を設けて創作活動を行った。
 - ① リズムについては2分音符、4分音符、8分音符、それに対応する休符を使用する。
 - ② 音階については、長音階と日本音階を使用し、音域を1オクターブ程度とする。
 - ③ 創作に用いるキャッチコピーは、生徒会スローガンや学年学級目標とし歌える作品にする。
 - ④ 友達の作品を聴きあい、仲間のアドバイスをもらいながら、作品の練り上げを行う。

○成果と課題

- ・創作する際の条件設定は、創作を苦手としている生徒には取り組みやすく、複雑なリズムなどの指定がなかったので、作品を創りやすかったと思われる。
- ・本実践で用いたアプリケーション「Garage Band」は、高度な設定もできるため、アプリケーション自体を使用する難しさを感じる生徒が出てくる可能性がある。創作のステップとしてアナログとデジタルを両方活用する必要がある。
- ・新潟大学大学院 特任教授 高橋 恒彦 様より、『音楽科の授業づくり』でご講演をいただいた。「今、求められている音楽の授業とは何か」「活動の楽しさや学びの意義とは」「音楽的な見方考え方とは」などに焦点を置かれた内容で、普段の授業づくりの要の部分をはっきり理解できる講演内容であり改めて音楽科の教科目標の改定のポイントを確認し研修を深めることができた。

8 運営の成果と課題

- ・県指定1年目と2年目の研究校と授業者を変えて取り組む。これまで音楽科は、2年間同じ学校で同じ授業者が研修を深めていたが、2年間違う学校で違う授業者で取り組むことで、様々な視点で研究に取り組むことができるのではないかと感じている。また附属新潟中学校の研究会にも参加し、市内の音楽科だけでなく大学の指導者や大学生との対話を通して、いろいろな面から学びを深めることができた。今年度県指定1年目の授業参観には、高等学校音楽教諭にも参加していただき、協議会で中高音楽教諭が意見交換をする場面を初めて設けたことが好評であった。
- ・令和7年度は、新津第一中学校の和田卓之教諭が授業を行う。来年度にむけて10月関東甲信越音楽教育研究会、11月県指定研修上越会場に参加し研修を深めた。次年度は多くの資料から生徒が選択し根拠をもとに感受したことを説明したり、仲間と対話したりする鑑賞の授業展開を考えている。

1 部会名 音 楽

2 郡市名 新 潟 3 会場校 新潟市立新津第一中学校(R7)・新潟市立鳥屋野中学校(R6)

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学大学院 ・ 特任教授	高橋 恒彦
(2) 研究推進責任者	新潟市立木戸中学校 ・ 教諭	関 裕子
(3) 会場校責任者	新潟市立新津第一中学校 ・ 教頭	渡部 睦
(4) 県・郡市指導主事		
(5) 研究推進委員(授業者) R7(授業者)	新潟市立鳥屋野中学校 ・ 教諭	今井 優太
	新潟市立新津第一中学校 ・ 教諭	和田 卓之
	新潟市立鳥屋野中学校 ・ 教諭	窪田 香
	新潟市立大形中学校 ・ 教諭	稲村 直輝
	新潟市立高志中等教育学校 ・ 教諭	春日 亜樹
	新潟市立新津第二中学校 ・ 教諭	山崎 園子
	新潟市立東新潟中学校 ・ 教諭	齋藤 恵美
	新潟市立西川中学校 ・ 教諭	高橋 翔
	新潟大学附属新潟中学校 ・ 教諭	松川 知樹

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人 数	主な内容
1	6/27 高志中等教育学校	11	県中教研指定研究1年目概要説明 役割分担と指導案検討①
2	7/16 新大附属新潟中学校	7	「創作」の授業 授業参観・意見交換会
3	8/1 木戸中学校	4	1年次ブレ授業検討会・指導案検討①
4	8/22 鳥屋野中学校	10	授業会場下見・指導案検討②
5	9/5 鳥屋野中学校	10	指導案検討③
6	9/26 鳥屋野中学校	8	指導案検討④
7	10/4 鳥屋野中学校	5	指導案検討⑤
8	10/31 鳥屋野中学校	5	1年次ブレ授業
9	11/7 鳥屋野中学校	11	1年次公開授業(新潟市中学校教育研究協議会音楽部会授業公開と兼ねる)
10	12/9 木戸中学校	4	1年次授業公開反省と来年度に向けて

※ 「委員どうしによる授業の見せ合い」は実施者等実施内容を記述する。

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 平川 剛志
(学校名: 長岡市立西中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 保健体育部

2 郡市名 長岡市三島郡

3 会場校 長岡市立秋葉中学校

4 研究主題

自己を客観的に捉え、課題解決に向けて深い学びにいたる授業の工夫

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

保健体育科の目標は、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」であり、3つの具体的な目標が示されている。

それらの目標を達成させるために授業では様々な手段を展開していくが、その中で保健体育科の永続的な課題の1つに「できる」と「わかる」がつかないということがあげられる。技能が向上し、記録が伸びたりパフォーマンスが向上したりするが、なぜできたのかを説明できなかったり、技能のポイントやコツを理解しているのになかなか技能に結びつかないという現状がある。また、できていないのにできていると思っていたり、できているのにできていないかと思ったりする生徒もいる。今回、そのずれている認識をまとめて『様々なずれ』と呼ぶことにする。当会では、その『様々なずれ』があることを前提に、これを解消するために考え試行錯誤していくことが深い学びに至る過程ではないかと考えた。また、その『様々なずれ』を解消させるためにまず必要なのは、自己の技能の客観的な認知であると考え、自己（ここでは自分の所属するグループも含む）の技能や状態を認知をさせ、深い学びに至る授業の工夫を主題と設定した。

また、今年度、県中学校教育研究会では、「深い学びにいたる授業」を研究主題とし、それを受け当会は保健体育科における深い学びの姿を、『保健体育科の目標を達成させるためにどうすればよいかを考え試行錯誤しながら実践する姿』と考えた。なぜできたのだろうか、なぜできないのだろうか、技能のコツやポイントは何だろうか、技能と思考や知識のずれを解消するために深く考え、実践していく姿を目指したい。そのために必要なことは、自己や自分のグループの姿を客観的に捉えることだと考えた。自己や自分のグループの姿を客観的に捉えることで、自己理解、相互理解が進み、課題がより明確になる。その課題を解決するために、自主的に活動に取り組む姿に期待する。この流れを大切に、繰り返していくことで深い学びに至るの姿の実現を目指す。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

球技「バレーボール」での実践である。バレーボールは、ボールを落とさずにつなげることやゲームで勝敗を競うことで楽しさを味わうことができる球技である。ゲームを展開させるために個人技能の獲得が必要であるとともに、チームでの作戦や判断が大切になる。そこで、今回はそんなバレーボールの『攻撃パターン』での実践で以下の視点で自己（自グループ）を客観的に捉えることについて研究する。

- ①客観的に捉えるためのツールの有効性はどうだったか。
- ②客観的に捉えるための授業の展開や工夫はどうだった。
- ③客観的に捉えることで、課題の解決につながっているか。
- ④客観的に捉えることで、新たな課題の発見にいたっているか。
- ⑤客観的に捉えることで、深い学びにいたる生徒の姿が見られたか(深い学びの技法との関わりを含む)。

また、深い学びに至る授業づくりの中心的な手段として、早稲田大学教職大学院の田中博之教授が提案する「深い学びの 20 の技法」を取り入れる。その中で、今回バレーボールの単元で取り入れる技法は以下の通りである。

＜設定＞③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする。

＜解決＞⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする。

⑩仲間と練り合いや練り上げをする。

＜表現＞⑬理由や根拠を示して論理的に説明する。

⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる。

この技法を手段の中核として研究を進める。

7 1年次の成果と課題

- “客観視”をテーマに研究を進めてきたが、技能の獲得や向上ために必要なポイントであると考え、深い学びにいたる可能性の高いものであると捉えた。
- “客観視”するために「タブレット PC」と「ワークシート」を活用をした。自分たちの動きを実際に録画し、それを再生しながら考えたり、うまくいったかどうかをワークシートに記録したりすることで、話し合い活動がよりスムーズにいき、客観視のためのツールとしてとても有効であったと考える。
- タブレット PC の録画の仕方は何度もプレ授業を重ねることでより比較や検討がしやすい画角や高さ等の設定をすることができた。
- 自分（たち）の課題の解決に向けて、深く考え込む授業の展開となった。特に、できない理由をよく考える姿が見られた。チームとして考える時間を十分に設けることで、個人で考えることが苦手な生徒も考えを調整していくことができた。
- △考えさせたいポイントを捉えさせながら技術の向上も目指すため、来年度はもう少し難しい課題を出してもよいかと考えた。今年度で基礎的な技能は身に付けることができた。
- △チームでの話し合い活動のあとに、個に戻して考える時間をもう少しとることで、より深い考えに至るのではないかと考えた。
- △全体の課題は与えたが、チームによっては技能が高く簡単にできるようになってしまった点があった
→そのため、さらにチームによっては何か追加の課題があってもよかった。

8 運営の成果と課題

- 少人数で積極的に話し合いながら運営することができた。
- 会場を学校外に設定し、時間も余裕をみたことで、全員が集まりやすく、話し合いを活発に行うことができた。
- △授業者の思いや考えを丁寧にくみとりながら研究を進めるために、研究推進委員長と授業者・会場校の密な連絡や打ち合わせを行う。

1 部会名 保健体育部

2 郡市名 長岡市三島郡 3 会場校 長岡市立秋葉中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟大学教育学部 ・ 准教授	檜皮 貴子
(2) 研究推進責任者	長岡市立西中学校 ・ 教諭	平川 剛志
(3) 会場校責任者	長岡市立秋葉中学校 ・ 教頭	阿部 共博
(4) 郡市指導主事	長岡市教育委員会 ・ 指導主事	川口 健児
(5) 研究推進委員(授業者) 研究推進委員 研究推進委員	長岡市立秋葉中学校 ・ 教諭	早川 菜津美
	長岡市立大島中学校 ・ 教諭	伊藤 裕也
	長岡市立小国中学校 ・ 教諭	大矢 洋美

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6 月 27 日/さいわいプラザ	5	○研究の方向性について ・ 前回研究の成果と課題 ・ 県中教研の方針の確認 ・ 保健体育科における「深い学びにいたる授業」の姿の共有 ・ 研究主題の検討
2	7 月 22 日/さいわいプラザ	5	○研究主題の具体化、授業者（秋葉中 早川先生）の授業構想 ・ 研究主題の具体的な姿の検討 ・ 課題と手立ての検討 ・ 授業者（秋葉中 早川先生）の単元・授業構想の検討
3	9 月 19 日/さいわいプラザ	6	○授業者（秋葉中 早川先生）のプレ授業の単元・授業構想検討 ○指導者の先生からのご指導
4	9 月 24 日/西中学校	5	○推進委員（西中 平川先生）による授業・協議会
5	10 月 11 日/秋葉中学校	6	○授業者（秋葉中 早川先生）のプレ授業の単元・授業構想検討 ○指導者の先生からのご指導
6	10 月 17 日/小国中学校	4	○推進委員（小国中 大矢先生）による授業・協議会
7	10 月 24 日/秋葉中学校	5	○授業者（秋葉中 早川先生）による授業・協議会
8	11 月 21 日/さいわいプラザ	5	○今年度の振り返りと次年度に向けて ・ 今年度の成果と課題 ・ 次年度への展望

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 菅原 久代
(学校名: 胎内市立黒川中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 保健体育部

2 郡市名 阿賀野市・胎内市・北蒲原郡 3 会場校 阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4 研究主題

深い学びの技法を用いて生徒の良さを引き出す授業実践
～ 生徒が主体的に学び合う授業を通して～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

今年度、県中学校教育研究会および阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中学校教育研究会では、「深い学びにいたる授業」を研究主題に掲げている。

「深い学び」とは、習得・活用・探求という学びの課程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考え方を形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることとされている。

(2016 中央教育審議会答申)

生徒は、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。よって、授業者にはこの中で、教える場面と、生徒に思考・判断・表現させる場면을効果的に設定し関連させながら指導していくことが求められる。

阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中学校教育研究会では、生徒同士の対話や学び合いを通じて資質・能力の育成に向かう実践を重ねてきた。しかし、「深い学び」を実現する具体的な手立てや単元構成の工夫などの授業改善は課題として残されている。そこで、県中学校教育研究会の研究推進委員会を中心に、早稲田大学教職大学院の田中博之教授が提案する「深い学びの20の技法」を手立てとして、生徒たちが主体的に学び合う中で、ただ技が「できる・できない」というだけではなく、自己の適性や役割に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかわりができるという生徒のよさを引き出す授業をつくりたいと考え、本研究主題を設定した。

保健体育科の目標は、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することである。その体育の「見方・考え方」として、「その運動の価値や特性に着目して、『楽しさや喜び』とともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性や役割に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかわり方と関連付けること」と学習指導要領に明記されている。

当保健体育部会では、「深い学び」に至る「見方・考え方」の働かせ方について協議した。『楽しさや喜び』とは、単に「技ができた」というだけでなく、「技ができるようにする過程」でも味わうことができると考えた。そして「技ができるようにする過程」と関連して、自分の技の課題に応じて、「する（トライ&エラーなど）」「みる（技のポイントや観察する視点を整理して観る）」「支える（仲間への補助や助言、励ましや声かけで失敗しても大丈夫な雰囲気をつくるなど）」「知る（技のポイントを

知ったり、メタ認知する、比較などで違いを知る、分析して論理的に説明する、振り返りをする)」などの多様なかわり方をすることで、たとえ運動が得意でなくとも、保健体育科の目標を達成することができると考えた。協議の結果、今回目指す「深い学びの姿」を、

○比較・分析・対話を通じて自己の課題を言語化する姿

○解決策を設定し、R－P D C Aサイクルを活用して実践していく姿

とすることにした。

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

今回、授業で取り扱う単元は、器械運動「マット運動」である。今回の実践では、運動技能が低位な生徒も、自己の課題に応じて、スモールステップを設定し、それに応じた目標を達成しようとすることや、そのような生徒に他の生徒が様々な手段でかかわることで、「全員で」でマット運動の技ができるようにしたいと考える。そこで実践では、発表として「グループ演技」を通じて個の役割を果たして個人の技能を伸ばしていく活動の中で、「深い学びの技法」を中心的な手立てとして講じることにした。今回取り入れる技法は、

＜設定＞④R－P D C Aサイクルを設定して活動や作品を改善する

＜思考＞⑥複数の資料や観察結果の比較から結論を導く

＜表現＞⑮自分の言葉で学んだことを整理してまとめる

＜評価＞⑱身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる（深い学びの20の技法より）

である。これらを生徒の主体的な課題解決過程に取り入れて実践を行う。

7 1年次の成果と課題

今年度、県中教研の指定研究1年目として、「する」「みる」「支える」「知る」という保健体育の見方・考え方から、生徒の良さを引き出すためにいくつかの手立てを考えてきた。研究推進委員会、二市北蒲保健体育部会、プレ授業など、回数を重ねて検討する中で、指導の構想、I C Tの活用、学習カードの工夫など、主題に迫る有効な手立てを発見することができた。

また、指導者の只木校長先生からは、「深い学び」や保健体育科教員として目指すべき授業の在り方について繰り返し指導していただいた。

今年度の研究を経て、目指す姿を「比較・対話を通じて自他の課題を言語化する姿」「課題解決を目指し、R－P D C Aサイクルを活用して実践していく姿」とした。また、深い学びの技法に関しては、来年度に向けて検討していく必要がある。手立てに関しては、学習カード・I C Tの活用ともにさらに有効になるように手を加えていく。単元計画、本時の展開に関しても、ねらいを明確にし、深い学びに到達できるよう、練習・指示・かわり方の工夫をする。来年度は指定研究2年目では、1年次に出た課題改善の手立てを検討し、研究発表会に向けて、生徒が保健体育の授業に親しみ、「楽しい」「分かった」「できた」という気持ちを高め、主体的に授業に臨めるような授業を行えるようにさらなる研究の向上に努めていきたい。

8 運営の成果と課題

7回の研究推進委員会と、公開授業に向けた3回のプレ授業、指導案検討として1回、授業公開・協議会として1回の保健体育部会を行った。夏に行った二市北蒲保健体育部会では指導者の只木先生に「保健体育で目指すべき“深い学びの姿”～深い学びにいたる授業づくり～」という題材で講演をしていただいた。「深い学び」に関する知識が深まり、部員が積極的に研究に努める姿が見られた。1年目としての研究推進委員会の回数、部会の回数、プレ授業の検討ともに十分であった。

1 部会名 保健体育

2 郡市名 阿賀野市・胎内市・北蒲原郡 3 会場校 阿賀野市立京ヶ瀬中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	村上市立岩船中学校 ・ 校長	只木 雅実
(2) 研究推進責任者	胎内市立黒川中学校 ・ 教諭	菅原 久代
(3) 会場校責任者	聖籠町立聖籠中学校 ・ 教頭	笹木 綾子
(4) 研究推進委員(授業者)	阿賀野市立京ヶ瀬中学校 ・ 教諭	半藤 圭輔
	阿賀野市立笹神中学校 ・ 教頭	恩田 徹也
	阿賀野市立水原中学校 ・ 教諭	佐藤 悠雅
	阿賀野市立笹神中学校 ・ 教諭	外山 東子
	聖籠町立聖籠中学校 ・ 教諭	小竹 武志

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6月24日/黒川中	8	第1回研究推進委員会 役割分担、教科で目指す「深い学びの姿」の検討、単元の選定、目指す「深い学びの姿」に到達する手立ての検討
2	7月3日/オンライン	6	第2回研究推進委員会 題材構想
3	7月30日/笹神中	6	第3回研究推進委員会 指導案検討①
4	8月19日/黒川中	16	第4回研究推進委員会 ※二市北蒲中教研保健体育部会を兼ねる 保健体育で目指すべき「深い学びの姿」の講話（只木校長先生） 指導案検討② プレ授業の計画作成
5	10月3日/笹神中	3	プレ授業① → 検討会 外山教諭による本時の授業の公開
6	10月4日/聖籠中	4	プレ授業② → 検討会 小竹教諭による本時の授業の公開
7	10月8日/黒川中	9	第5回研究推進委員会 プレ授業③ → 検討会 相馬教諭（二市北蒲部員）による本時の授業の公開 プレ授業①～③を終えての指導案検討
8	10月21日/オンライン	6	第6回研究推進委員会 指導案検討④（最終）
9	11月6日/京ヶ瀬中	25	二市北蒲中教研一斉研修 ※県中教研指定研修 1年次プレ授業公開 半藤教諭による公開授業→協議会
10	11月19日/黒川中	7	1年次の成果と課題、来年度への方策、来年度の予定の検討

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 米山 優子
(学校名: 上越市立頸城中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 学校保健部

2 郡市名 上越市

3 会場校 上越市立吉川中学校

4 研究主題

人とのかかわりを通して多様な考えや行動を認め合える心の健康教育
～自己肯定感とレジリエンスを高める指導の工夫～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

保健室で日々生徒と関わっている中で以前より気になっていることがある。それは、「心の健康」である。「困ったときにより方向に考えたり、行動に移したりすることができない生徒」「ネガティブな感情を持ったとき、自分一人で抱え込んでしまう生徒」等が多い傾向にある。困難やストレスを感じるような場面に直面したときや、気持ちが落ち込みなかなか気持ちを切り替えられないとき、直面した課題に自分なりの解決方法を見いだしていくことができるように育ってほしいと願っている。

そこで、生徒の実態から目指す生徒の姿を

- ・主体的に取り組む（自分事としてとらえる）姿
- ・生徒と授業者、生徒と生徒が対話する（多面的・多角的な視点）姿
- ・自己実現に向けて考えを深める姿

の3点とした。生徒が自分の体験等から自分の思いを語り、また仲間の語りを聞くことで、互いに認め合う共感的な人間関係の育成が強化されたり修正されたりするのではないかと考えられる。さらに、迷いや葛藤の中から自分事として捉えることで励まし合い、支え合う集団づくりにつながると考える。以上のことから、研究主題を上記の通りに設定し、研究を推進していく。

6 研究の方法と内容

(1)「こころのアンケート」「自己肯定感尺度」の調査を実施し、生徒の実態把握と課題の明確化

- ・事前事後で実態調査をすることで、生徒の意識の変容を見とり、次の活動への指針とする。

(2)土台作りとなる人間関係を育む教育・校内の環境作り

- ・日常の教育活動と関連させて活動を仕組むことで、日常的に生徒の達成感を積み重ねていく。

例えば、学校行事（体育祭、OKAMI 遠足、音楽祭）や学級活動・生徒会活動等を通して日常的に取り組む。

(3)授業づくりの工夫

①自分事として考える導入・発問・資料の工夫

- ・生徒が自分事として考え、よりよい生き方を模索できるよう、生徒の生活体験等と関連付けた導入や終末を工夫する。

②授業者のスキルの向上

- ・傾聴の態度を意識して行うことで、生徒が物事をより深く、多面的・多角的に考えられるよう支援する。

③教材教具の工夫

- ・生徒の思考を予想し、それに沿った発問、考える必然性や切実感のある発問、興味関心が湧くような教材の提示等、物事を多面的・多角的に考える発問や教材を工夫する。

④傾聴・受容に着目した学級風土づくり

- ・授業の中では、深い学びに至るために「聴く」ことの工夫や手立て、授業者のスキルや生徒のスキルを明確化し、話合いのためのツール（ホワイトボードや ICT 等）を活用する。
- ・生徒との日常会話を大切にして、生徒の変化を捉える。

⑤振り返りの充実

- ・生徒が何を学び、どのように考えを深めることができたのかを見取るために、「目指す生徒の姿」に合わせた共通項目を設定し、振り返りの時間を確保する。

以上を踏まえて、授業づくり・授業の基本型を以下のように設定した。

- ・導入部で生活体験を聞いたり、補助資料を活用したりして「自分事」としてとらえられる工夫をする。
- ・中心発問等では、互いに聞き、語り合う場面を設定する。
- ・振り返りの時間を確実に設ける。（5分以上）

7 1年次の成果と課題

<成果>

- ☐ 生徒の実態から「自己肯定感尺度」「レジリエンス尺度」を活用することで生徒たちの実態を把握することができた。
- ☐ 学校の教育活動に位置付けられている「いじめ見逃しゼロスクール集会」での活動を導入部分で振り返り感情の捉え方に着目して授業を進めたことは有効だった。学校の教育活動と関連させながら授業づくりをしていくことは効果がある。
- ☐ 不安や心配等のネガティブ感情やマイナスの思い込みを分類し、自分の感情の表現方法を、動物（今の自分の気持ちは「〇〇犬」）で提示したことは生徒にとってわかりやすく有効だった。また、生徒の興味関心を引くような資料提示や心の変容を自分で理解できるワークシートも有効である。

<課題>

- 養護教諭の専門性が発揮できるようなティームティーチングについて検討する。
- 「心の健康」を重視した健康教育が進められるよう全体計画を立案する。
- 生徒同士・対教師と対話が深まるような日々の活動や授業づくりを考えていく。
- 教材教具の工夫や生徒の心の変容が分かるようなワークシートを工夫していく。

8 運営の成果と課題

<成果>

- ☐ 指導者からの適切な指導が有効的であり、研究推進委員全員で共有することができた。
- ☐ 研究推進委員会では「心の健康」に関わっての授業づくりの構想について情報交換することで、研究推進委員同士の学びにつながった。

<課題>

- 次年度に向け、見通しをもって本発表を迎えられるように研究推進計画を立てて推進していく。
- 計画的にプレ授業を行い、ブラッシュアップしながら本発表の授業を練り上げていきたい。

1 部会名 学校保健

2 郡市名 上越市

3 会場校 上越市立吉川中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	学校法人北陸学園 講師	中村 直美
(2) 上越市指導主事	上越市教育委員会・指導主事	板垣 希望
(3) 研究推進責任者	上越市立頸城中学校・養護教諭	米山 優子
(4) 会場校責任者	上越市立吉川中学校・教頭	大桃 和行
(5) 研究推進委員(授業者)	上越市立吉川中学校・養護教諭	竹内 美穂子
	上越市立吉川中学校・校長	櫻井 直人
	上越市立八千浦中学校・養護教諭	丸田 史恵
	上越市立柿崎中学校・養護教諭	寺澤 弘美
	上越教育大学附属中学校・養護教諭	高橋 由子
	妙高市立新井中学校・養護教諭	宮川 圭

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	7月18日/吉川中学校	8	研究概要について
2	8月27日/吉川中学校	9	研究についての検討
3	10月23日/吉川中学校	8	プレ授業指導案検討、プレ授業に向けての準備の確認
4	10月29日/吉川中学校	2	いじめ見逃しゼロスクール集会の参観
5	11月19日/吉川中学校	9	研究発表会（1年次）
6	12月19日/吉川中学校	10	1年次研究のまとめ（成果と課題）、2年次の計画について

令和6年度 県中教研指定研究 経過の概要報告書（1年次）

新潟県中学校教育研究会会長 様

報告者氏名 渡邊 秋子
(学校名: 新潟市立新津第一中学校)

このことについて、下記のとおり報告します。

1 部会名 学校保健部

2 郡市名 新潟

3 会場校 新潟市立木戸中学校

4 研究主題

健康的な生活の行動化を促す保健教育
～ ヘルスリテラシーの向上を目指して ～

5 主題設定の理由と目指す深い学びの姿

GIGA スクール構想による一人一台のタブレット配付やスマートフォンの急激な普及により、生活習慣の乱れ等からくる体調不良や依存症など、子どもたちの心身の健康課題はますます深刻化している。さらに今は、健康情報を含めた多様な情報がインターネットやSNS等を通じて簡単に入手することができるため、これからの時代は健康情報を収集する力より、適切な情報を選択・活用していく力、すなわち健康情報リテラシー（ヘルスリテラシー）を高める教育の必要性を感じる。

ヘルスリテラシーとは「健康や医療に関する情報を入手し、理解し、評価し、活用（情報を使うことにより健康に結び付くような、よりよい意思決定を行うこと）する力」と定義されている（中山ら2016）。そこで本研究では、ヘルスリテラシーのプロセス（図1）を基に、入手した情報の理解・評価を他者と関わり合って学ぶことを通して、多様な解決方法の発見や自己の考えをより深めることができ、よりよい意思決定や行動につながるのではないかと考え、この研究主題を設定した。



図1 ヘルスリテラシーのプロセス
(中山、2016 より引用)

6 研究の方法と内容（深い学びの技法）

養護教諭が行う保健教育の多くは、特別活動で一つの単元や1時間の実践を行うことが一般的である。しかし、1時間の授業でヘルスリテラシーのプロセス全てを取り入れ、対話的な学びを通して深い学びへとつなげるには時間的に難しいと考える。そこで、1時間の授業の中にヘルスリテラシーのプロセス全てを活動として取り入れるのではなく、情報の入手を事前課題としたり、授業者側から提示したりするなどの工夫をする。

生徒自身が健康課題を明らかにし（設定：①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する）、既習の知識や入手した情報を基に、健康課題の解決に向けて個人から集団での対話的な活動によって、深い学びへとつなげたい（思考：⑧異なる多様な考えを比較して考える 解決：⑩仲間と練り合いや練り上げをする）。そして、生徒が具体的な健康行動を書き出したり、発表したり（表現：⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる）等、表現することによって、主体的な意思決定ができ、健康的な行動へと促せるようにしたい。

7 1年次の成果と課題

(1) ヘルスリテラシーのプロセスについて

事前学習で睡眠に関する情報を入手・評価し、その情報をクラスで共有することで新たな選択肢の発見につながっていた。また、適切な意思決定のために意思決定ガイドを活用し、情報の長所・短所・重要度を具体的に考えることで、収集した情報を可視化・整理することができ、自分自身の知識と経験を基に見方・考え方を働かせることにつながっていた。

課題としては、ヘルスリテラシーのプロセスを踏むことを目的とするのではなく、習得した知識や得た情報を基に自ら考え、対話的な学びにより考えを深め、適切な意思決定や行動へとつながるような手立てを検討していきたい。また、意思決定ガイドの活用だけでなく、個や集団の考えを深めるための発問や教材等の工夫が必要だと感じた。さらに、ヘルスリテラシーの向上や深い学びのためには、養護教諭の実践だけではなく、関連教科や学級担任とのチームティーチングを検討する等、系統立てた保健教育の位置付けや実践が必要だと感じた。

(2) 対話的な学びについて

対話的な活動で他者の意見に触れることで自分だけでは気付かなかった新たな視点を得たり、自分の考えと比較したりすることで自己の考えを深め、深い学びへとつながっていた。また、個人でワークシートが書けない生徒も班活動により、内容を理解し、自分の考えを整理・表現でき、その生徒なりの深い学びへと促すことができた。

課題としては、発問や発表内容についての指示が明確でなかったこと、説明や個人活動の時間が長くなってしまったこと等、対話的な学びへと促す指導技術が不十分なことが挙げられた。生徒と教師の対話で課題意識をもたせたり、生徒の考えを引き出し、フィードバックしたりすることで、新たな視点や多様な選択肢の発見を促し、主体的でより深い学びへとつなげていきたい。

8 運営の成果と課題

市中教研養護部6地区が同じ研究主題で研修を進め、各地区で指導案を作成し、授業実践を行った。その中の1地区が県中指定研究の研究推進委員となり、公開授業を行った。また、作成した指導案を基に、各校でも授業実践を行った。

成果としては、教師の主体的な学び合いが実践されていたことである。特に、公開授業後の協議会では、KPT法を用いて教師の学び合いを行った。協議会では、授業の取組を客観的に評価し、問題点や改善点に気付くことができ、活発な意見交換ができた。生徒だけでなく、教師側の話し合い活動も互いの意見を尊重し、改善策を検討することで、チームワークが強化され、深い学び合いになったと感じた。その結果、2年次の研究の取組に向けての成果と課題を導くことができた。

課題としては、県中教研学校保健部の指定研究が1年ずれたことにより、市中教研養護部の研究の周期とずれが生じ、取り組み方に工夫を要したことである。そのため、研究の方向について大きくはずれてはいないものの、研究テーマの捉え方について、養護部全体において共通理解が不十分であったように思う。

これらのことを踏まえ、2年次も今年度同様、教師同士で学び合いながら指導案の見直しを行い、養護部全体へも理解が深められるよう発信し、研究を進めていきたい。

9 引用・参考文献

- 福田洋・江口泰正（2016）『ヘルスリテラシー 健康教育の新しいキーワード』大修館書店
中山和弘（2022）『これからのヘルスリテラシー 健康を決める力』講談社

1 部会名 学校保健部

2 郡市名 新潟

3 会場校 新潟市立木戸中学校

4 研究推進委員会

役 割	所 属 ・ 職 名	氏 名
(1) 指導者	新潟青陵大学看護学部看護学科 教授	塚原 加寿子
(2) 研究推進責任者	新潟市立新津第一中学校 養護教諭	渡邊 秋子
(3) 会場校責任者	新潟市立木戸中学校 教頭	長谷川 智明
(4) 県・郡市指導主事	新潟市教育委員会 指導主事	本間 道子
(5) 研究推進委員(授業者)	新潟市立東石山中学校 養護教諭	上野 雅
	新潟市立木戸中学校 養護教諭	永井 明子
	新潟市立濁川中学校 校長	武田 統理
	新潟市立亀田中学校 校長	大橋 正治
	新潟市立金津中学校 養護教諭	三澤 香里
	新潟市立白根北中学校 養護教諭	武之内 聡美
	新潟市立宮浦中学校 養護教諭	三富 明美
	新潟市立藤見中学校 養護教諭	松本 恵
	新潟市立東新潟中学校 養護教諭	本間 美和子
	新潟市立山の下中学校 養護教諭	川波 亜麻音
	新潟市立大形中学校 養護教諭	高橋 哲子
	新潟市立石山中学校 養護教諭	金 美千子
	新潟市立下山中学校 養護教諭	加藤 穂乃佳
	新潟市立東特別支援学校 養護教諭	宝金 順子

5 研究推進委員会の実施日、参加人数と内容

回	実施日／会場	人数	主な内容
1	6/ 7 木戸中学校	4	1年次会場校へ挨拶、打ち合わせ等（会場校校長・教頭・部長・研推長）
2	6/20 新津第一中学校	12	指導案検討 （第2回養護部幹事会・研推会議兼ねる 地区研推・4役・R6 R7 授業者）
3	7/11 医科学センター	67	研修会 指導者による講話「授業実践に活かすヘルスリテラシーとは」 （第1回養護部研修会兼ねる）
4	8/27 藤見中学校	11	指導案検討（東区養護教諭・研推長・副研推長）
5	8/28 木戸中学校	6	1年次授業公開について会場校との打ち合わせ （会場校教頭・R6 授業者・4役）
6	9/19 藤見中学校	11	指導案検討（東区養護教諭・研推長・副研推長）
7	9/30 新潟青陵大学	6	指導案検討 （指導者・東区研推・R6 R7 授業者・研推長・部長）
8	10/ 3 藤見中学校	15	指導案検討（東区養護教諭・4役・顧問校長）
9	10/29 下山中学校	4	プレプレ授業・テスト配信 （R6 授業者・テスト配信担当・プレプレ授業者）
10	11/ 1 木戸中学校	4	プレプレ授業 （R6 R7 授業者・東区研推・研推長）
11	11/ 7 木戸中学校	20	1年次授業公開 （上記研究推進委員・全県部長・上越授業者）
12	12/20 藤見中学校	11	1年次成果と課題の確認、指導案の見直し （東区養護教諭・4役）
13	2/ 4 宮浦中学校	6	次年度計画検討と確認（東区研推・R7 授業者・4役）